

ジョージ・エリオットの小説

——主題と手法——

四 「フロス河畔の水車場」

ジョージ・エリオットの自伝的作品と呼ばれる「フロス河畔の水車場」は、すべての点において前作「アダム・ビード」の様相を異にする。舞台は牧歌的な田舎の村を離れ、フロス川沿いのセント・オッグスという共感不在、愛情不毛の町と、フロス川沿いに注ぐリプル川の川辺に立つドールコットミルへと移る。他の作品に比べ登場人物の数は少なく、プロットはきわめて単純であり、ユーモアはほとんど感じられない。物語の焦点は九歳で登場し、十九歳

塩川千尋

で短い生涯を閉じるマギー・タリバーひとりに絞られる。ほとんど常に舞台中央にいて誰よりも強烈なスポットライトを浴びながら、マギーはただひたすら傷つき苦しむだけであり、苦悩の報酬として共感の教義に改宗され、心の安らぎを得るわけではない。作品全体を貫くものはタリバーの血とドドソンの血、感覚と無感覚という相反するものの対立が生む『苦痛』であり、作品には厭世的な重苦しい空気が漂う。肯定的要素と言えば、せいぜい、フィリップ・ウェイカムがマギーの苦しみに共感する心を得、彼女を愛し続けることに自らの存在意義を見出すことぐらいであるが、これとても読者は彼自身の手紙の文面で知らされるだ

けであり、その時にはフィリップはすでに舞台から姿を消している。陰と陽の見事な統一が見られた「アダム・ビード」に比べ「フロス河畔の水車場」にはあまりにも陰の要素が強い。物語は氾濫したフロス川の濁流の中でマギーとその兄トムが抱き合って死んでゆく結末に向かって悲劇の度を強めてゆく。途中、ボブ・ジェイキンがコミック・リリーフにひと役買っているだけであり、読者にとっては息の詰まる思いだ。マギーにはなんの救いも与えられない。彼女を取り囲むものは他人の苦しみに対する無感覚、自己満足、無知、独善、冷酷である。セント・オググスの守護神、聖オググにまつわる伝説は共感を説く伝説でありながら、町には共感も存在しない。この作品の中でジョージ・エリオットはなぜ人間の暗いネガティブな面しか描けなかったのだろうか。「アダム・ビード」と「フロス河畔の水車場」の基調の変化はあまりにも急激である。

ジョージ・エリオットは小説家になる以前に書いた「女流作家の愚かな小説」と題するエッセイの中で、当時の女流作家の大部分が実生活ではありえないようなことを題材に、人生を歪めて描いていることを攻撃している。彼女は小説が現実の粹組の中だけか成立し得ないことをよく承知

していたし、事実、小説家ジョージ・エリオットは「牧師館物語」と「アダム・ビード」の中でリアリズム宣言を掲げている。この宣言は作品の中で具体化され、とりわけ後者の作品において見事に実行されていた。しかし、それと同時に、ミラー・バートンやダイナ・モリスに見られるように、ジョージ・エリオットは「共感への改宗」を描く主題部において、「共感の教義」をきわめて意図的に説こうとするあまり、センチメンタリズムと理想化に陥り、あっさりと眞実らしさを犠牲にしてしまうという矛盾を持った作家である。そこに自ら掲げた旗印である彼女のリアリズムの限界があり、彼女の作品の大きな弱点があると言える。

しかし「フロス河畔の水車場」の欠陥は、明らかに他の作品のそれとは性質を異にする。なぜなら、前述のとおり、ジョージ・エリオットはこの作品においては自ら明言する『共感を説く』という小説の倫理的使命を放棄しているからである。マギーはただ苦しむだけであり、作者はマギーの苦悩なんの意味も与えることができなかった。それではマギーを通して自らの精神形成史を物語っているのかと思えば、それは作品の途中までであり、マギーが美しい白鳥に成長すると（この点においてマギーと作者は異なる）

レビューは指摘する⁽¹⁾。物語の自伝的色彩は薄れてゆく。その意味ではこの作品によってジョージ・エリオットが何を訴えようとしたかは不可解である。そもそも作品のタイトルを決めかね、結局出版業者のブラックウツドの思いつきに飛び付いたという事実は、彼女にこの作品に対する明確なビジョンが欠けていたことを端的に示すと言えるのではないだろうか。事実、そういう印象を与えるほど、「水車場」における人物描写やプロットの展開には、ネガティブな色彩が濃い。しかも結末にみるや、物語はいっきよに甘くなり、作者はまったく自分をコントロールできなくなつてしまふ。一読した読者は、まずこの点に大きなひっかかりを感じる。どうもそれを解明する手がかりを得るためには、ジョージ・エリオットの私生活に目を向けなくてはならないようだ。「フロス河畔の水車場」は、作者自身の暗い憂うつな精神状態をそのまま反映しているように思えてならないからだ。

実際、彼女がこの作品にとりかかっていた頃、彼女をきわめて憂うつにさせ、人間に対するにがにがしい、悲観的な視点を与える出来事があった。それは「リギンズ事件」がきわめて深刻化したことと、姉クリッシの死である。

ジョージ・エリオットは、妻子あるルイスとの同棲という事実を世に知られたくなかつたため、正体を隠したまま前二作を発表した。このことはジョセフ・リギンズという牧師がジョージ・エリオットであろうという噂を生む。この噂は当のリギンズがそれを否定しなかつたことから信憑性を高め、ついにはギヤスケルを含め多くの人々が信ずるに到る。そして「アダム・ビード」の爆発的売行きと共に、第三者には滑稽な一面を持つこのリギンズ事件も、ジョージ・エリオットにとってはきわめて深刻な問題となつてゆき、ついに彼女は正体を明かす決意をする。自分ではルイスとの関係を結婚と見なし、自らをミセス・ルイスと呼んでみたところで無駄な抵抗であつた。家族に見捨てられ、友人も減り、ルイスとひっそり暮らしていたジョージ・エリオットに今度は世間の冷たい批判的な目が向けられる。「アダム・ビード」の作者を痛烈に誹謗する記事もいくつか現われた。他人の批判には病的に神経質で、ほんの些細な心配もたちまち彼女の心全体をおおう暗雲となつてしまふ性格を考えれば、このためにどれほど暗く陰うつな精神状態に陥つていったかは想像に難くない。

しかも追い討ちをかけるかのように、この頃姉クリッシ

イが亡くなっている。クリッシィは彼女にとって特別な存在であった。ルイスの關係を知つて以来、一切の關係を一方的に断つた兄アイザックの心を和らげてくれるかも知れないという希望を託した唯一人の存在だったのである。姉の死はこの希望を打ち砕いた。やがてこの絶望感⁵は作品の結末に大きな影響を及ぼすこととなる。

「フロイス河畔の水車場」を準備している間に書き上げた「はがされたベール」という小品は、こうした彼女の精神状態を反映している。この作品の基調となっているものは、人間不信、絶望的と言へるほど悲観的な人間観である。主人公ラティマーの性格も暗い面ばかりが目立つ。彼は鋭敏な感受性を持つが、それはもっぱら人間の暗い、醜い、ネガティブな要素にばかり発揮される。彼の心は人間の冷酷な声に震え、人と少しでも心の触れ合いを持つことはない。したがって彼のもっとも大きな特徴は孤独である。「詩人の感受性を持ちながら詩人の声は持たない」ことが示すように、ラティマーは常に受身の姿勢を取り、積極性を少しも感じさせない。彼には将来起きる出来事を幻覚によって予知する能力が与えられている。彼は兄アルフレッドの婚約者バーサ・メイソンに引かれてゆくが、ある

日、彼女が自分の妻となっている幻覚を見る。しかもその幻覚に現われた妻バーサは彼に軽蔑と憎しみと嫌悪感に満ちた冷たい目を向け、心の中で夫の死を待ち望んでいる。

この恐ろしい幻覚を見ながら、ラティマーは現在の感情に負け、バーサの魅力に酔いしれる。さらに彼には他人の心の内を読み取れる能力も与えられる。ところがバーサの心だけは分からない。このことがますます彼女に対する情熱を煽る。兄の突然の死は彼が見た幻覚どおり、バーサとの結婚を実現させる。そしてバーサの心を覆い隠していたベールのはがされる日が来る。その時ラティマーが見たものは、妻の浅薄で虚栄心に満たされ、感受性も知性も想像力もまったく持たぬ不毛な心であった。しかし彼が見抜いたこの不毛な心はバーサに限ったことではない。彼と接触を持つ人間すべての心は同様に浅はかでエゴイスティックで偏狭で下劣なのだ。彼にはそれが手に取るようによく分かっているためだけにラティマーの人間不信、人間嫌いはいっそう強まる。

物語は医師マーニユイの登場と共にゴシック・ロマンスの様相を強めてゆく。マーニユイは輸血によって既に死亡したミセズ・アーチャーを一瞬ではあるが生き返らせる。

生き返ったアーチャーの目は、バーサを見るとたちまち激しい憎しみに満たされる。彼女の心は憎悪に波長を合わせたまま死んだのであり、生き返った命は憎しみの不協和音を出しながら今度は永久に死んでゆく。生き返るとはこんなことなのか——読者にとってはやり切れないほどジョージ・エリオットの目は悲観的で厭世的なのだ。ラティマーが初めて経験する幻覚の中で見たブラハの、鉄板を敷きつめたようなカラカラに乾き切った様子は、そのまま彼を取り囲む、思いやりと愛情の枯渇した、不毛で潤いのない人間の心の象徴でもある。

この「はがされたベール」の人間否定的な調子は「フロス河畔の水車場」へと受け継がれていく。マギーを取り囲む人物のほとんどは、ネガティブな面ばかりが強調されている。その典型はマギーを何よりも苦しめる兄トムの性格である。トムの描写には後述のような複雑な要因がからんでいるが、作者の陰うつな精神状態も強く影響しているように思える。

ジョージ・エリオットがマギー・タリバーの短い生涯を長々と語るこの作品が記者の心にもっとも強く刻み込む印象は、マギーがトムの冷酷、独善、心の偏狭、そして想像

力の欠如が示す他人の苦しみと過てる者の弱さに対する思いやりの欠如にどれほど苦しめられ、傷つけられ、そして反撥したかということである。二人の葛藤は、父方タリバーの血と母方ドソンの血の対立を象徴する。そして常に感受性の強いマギーが一方的に傷つく。作品の四分の一弱を占めるマギーの幼年時代を描いた部分は、そのことを示すエピソッドに満ちている。マギーは強い「愛される必要」を兄に向けるが二人の間における愛情の流れ方は一方的であり、物語の最初から妹は兄に愛情を示すが、兄はその愛にはまったく鈍感である。トムが初めて登場する場面——休暇で学校から帰ってくる場面（第1部5章・以後I・5と省略する）——では、久し振りに会えたりれしさからマギーは兄の首に抱きつくが、兄は「小さな牧草地、子羊、川」を見ながら「明日の朝、まっ先に釣をしよう」と考えている。

作者はトムを「ラダマンテュスのような」と形容し、彼が正義感あふれる少年であるかのように言う。しかし、年に似合わぬトムの正義感、実際には過を犯した者には必ず罰を与えずにはおかないという厳しさを意味する。しかもこの厳しさはけっして自分に向けられることはない。そ

れでも幼いトムにはまだ一抹のやさしさが見られるが、やがて年と共に彼は独善的な性格を強め、そのわずかなやさしさを失ってゆく。父が水利権をめぐる訴訟に敗れたことから経済的に破綻をきたした家を再建するという大仕事に持てるエネルギーをすべて燃焼させたことが、トムの心から余裕、潤いを奪ったのかもしれないが、彼に向けられるジョージ・エリオットの目は冷やかである。家の再建のためには他のすべてを切り捨てられるトムの性格を彼女は「自己との統一を持った性格」(V・2)と呼ぶ。しかし実際に彼がそのために犠牲にしているもの、我慢しているものの内容は、きわめて浅薄で俗っぽいものとして描かれている。要するに「自己との統一を持った性格」とはマギーの中で展開されるような激しい内的葛藤、複雑な屈折はあり得ない単細胞的人間であることを意味している。

妹が父の宿敵、弁護士ウェイカムの息子フィリップと一年近くも逢引きを続けていたことを知ったトムは、フィリップに激しい怒りを向ける。彼はその怒りが義憤であると信じて疑わないが、ジョージ・エリオットはそういうトムの単純さ、独善を次のように分析する。

彼は息子としての、そして兄としての義務を果たすべ

く言うつもりでいる辛辣で手厳しい言葉に、遠い少年時代の嫌悪感と単なる個人的プライド、敵意がどれほど多く関与しているかを知らなかった。トムは手に触れることのできない他のものと同様、自らの動機を厳密に調べてみるようなことはしなかった。行動のみならず、自分の動機は立派なのだと確信し切っていたし、もしそうでなければ動機などとはなんの係りも持たなかっただろう。(V・5)

トムはマギーが父親への愛情を口にしながらその実、父親の「もっとも強い感情」を踏みにじったと捉え、彼女には「一貫性」がなくなっただけで信用できないと思う。一方マギーは兄がフィリップに浴びせた言葉の中で、彼のせむしという身体的欠陥に触れたことに激しく反撥する。こうして「幼年時代の黄金の門」(II・7)を通り抜けた兄妹の間に最初の仲違が起きる。この仲違は父の死によって解消されたかのように思える。しかしトムは一度抱いた偏見を捨てられない人間であり、仲違した相手との完全な和解はあり得ない。父が死んだ時、確かに二人は「しっかりと抱き合っている、一緒に泣いた」(V・7)かも知れないが、トムの場合、それは一時的な感情の表われに過ぎない。現に彼は妹から

強要した約束を反古にはしていない。彼女がフィリップに会い許可を求めに来た時も、「私はお前が相手じゃどんなことも確信できない」(傍点・エリオット)(VI・4)とマギーに対する不信感をあからさまに口にする。結局トムは妹にその許可を与えるが、それはいとこルーシーがフィリップを家に招きたがっていることを知ったことが動機になっており、彼女に対する気持が和らいだからではない。

トムはドールコットミルをウェイカムから取り返すという父の悲願を達成する。それは多分にフィリップの尽力に負うていたが、そのことをルーシーから知らされてもトムの心はなんの動揺もきたさない。フィリップに対する嫌悪感、敵意、偏見を反省する気持も感謝の念も彼の心には湧いてこない。黒か白か、正か邪か、という二元的なレベルでしか働かない狭い知性、心の機微がまったく通じない鈍感、自分の正しさを信じて疑わない高慢——要するにトムは偏見と独善に固められた、まったく魅力のない人物であり、この印象は読者の心の中に深く浸透している。したがって、「我がが善良にして高潔なるトム・タリバー」(VI・12)という、普通なら冗談半分皮肉半分の表現も、ここでは痛烈なトム批判としてしか受け取れない。

実社会に出たトムの行動力、水車場を取り戻すことにかける執念・集中力は評価されてしかるべきかも知れないが、彼の場合、ただそれだけしかないのだ。このことに対するジョージ・エリオットの批判はディーンの悲しみにも表われている。「仕事以外のことには大して関心はありません」(VI・5)というトムの言葉に、自力で高い地位を得、財を成した仕事好きのおじディーンですら寂しく思う。実務的能力はあっても仕事以外のことには興味を示さない偏狭、潤いと余裕の欠如を悲しんだのだ。トムには重大な性格的情緒的・欠陥があり、マギーに思いやりを示すことはあり得ない。彼の心に深く根を張ったマギーに対する不信感を取り除くものは何もない。この印象は、ステイブン・ゲストと形の上では駆け落ちしながら、ひとりで帰ってきたマギーを家の中にも入れず、冷静にこっぴどく非難するトムを描く場面で極る。

こういう調子は、さらに他の人物描写にも表われる。トムの教育に当たるステリング牧師は、さしたる才能も持たないくせに、野心と自信だけは強い人間として描かれる。彼の教え方は作者の痛烈な皮肉の対象となっており、この皮肉はさらに当時の教育全体にまで及んでゆく。彼はトム

の頭の悪さに閉口するが、教育がトムの「並外れた愚鈍さ」(II・4)の前に負けてはならぬとばかり、ただやたらと厳しくなる。彼には教育が「微妙で困難な」仕事であるという認識がなく、相手かまわず画一的な教育をやるしか能がない。彼は教育ばかりか、専門分野である宗教をも含め、すべてにおいて「しろくと臭く、生かじり」(II・1)なのだ。その妻ミセズ・ステリングは、次のごとく簡潔、かつあざやかに描かれる。

ミセズ・ステリングは、人を愛する、やさしい心を持った女性ではなかった。彼女はスカートが体にびったり合う女性であり、あなたに、御機嫌いかが、と訊ねながら夢中になった様子で服装を整えたり、カールにちょっと手をやる女性であった。(II・1)

さらにセント・オッグスの人間の典型として描かれるドソン一族の女達とその亭主は、無知、強欲、偽善、自己満足、愚鈍といった面が強調される。ドソンの柱と自負するミセズ・グレッグは、「ドソンの掟」を盾に身内の欠点を齒に衣着せず指摘し、過を犯せば厳しく咎める。訴訟に敗れ破産したタリバーを救おうと開かれた家族会議では、彼女はただタリバーを非難するだけである。乞食同然

になった以上、謙虚に親類の助けを乞うべきだと言うミセズ・グレッグはいかにも高慢であり、彼女には、同じように辛辣で口うるさかったミセズ・ポイザの暖かみは少しも感じられない。彼女は最後のところでマギーを守ってやることにより、読者を驚かせる。しかし彼女は単に「ドソンの掟」に従っただけであり、マギーに対する暖かい気持の表われではない。罪を犯した者には相応の罰を与えるのが掟なら、罪がはっきり証明されるまでは身内を徹底的に守ることも「ドソンの掟」だからだ。ミセズ・グレッグの身内意識の強さは、裏を返せばそれ以外の人間に対する無関心を意味する。要するに彼女は掟の外には一歩も出ることのできない狭い視野の持ち主である。

おじブレットは、ウエリントン公爵の名前も知らなければ bell (ベル) と belle (美人) の区別もつかず、主教 (Bishop) を准男爵 (Baronet) のようなものと思ひ込んでいるほど無知な人間である。その妻ミセズ・ブレットは死のオプセションに取り憑かれており、登場するたびに他人の死やら病気を口にし、涙を流す。そして彼女の家には「葬式のような厳肅さ」(I・9)が漂っている。

マギーの両親とて例外ではない。母ベッシー・タリバー

については、愚かという一言で言い尽せる。それも並み大抵の愚かさではない。最初は一見無害に見える「金髪のかわいらしい女性」(I・2) ベッシーの愚かさは、実際には夫の悲劇のメインスプリングとなる。彼女が動くことはすなわち事態を悪化させ、人に害を与えることを意味するのであり、作者はベッシーの愚かさを徹底的に暴露する。夫と息子との教育について話し合えば、彼女は息子の「洗たく物や繕い物」の世話をしやれる学校を選ぶことしか考えない。彼女は夫と何年いっしょに暮しても、夫を自分の望む方向に動かせるという幻想を持ち続け、実際には夫が常にその逆の方向に動くという事実を認識できない。ベッシーは経験がなんの痕跡も残さず素通りしてゆく人間であり、何年生きても何ひとつ学ぶことのできない人間なのだ。「浅薄な頭脳」しか持たず「知性において夫より著しく劣る」(III・1) ベッシーは、夫が破産し、自分が何よりも大切にしていたリネンや陶器を失うと、「この空虚な人生において途方に暮れた」(IV・2) まま、私はこんな運命に価値ないと自分を憐み、子供に向かって夫の愚痴をこぼす。この、著しく読者の神経にさわるベッシーの愚かさは、彼女が夫を助けようとウエイカムを訪れる場面(III・

7)で極る。彼女は自分では気付かずに敵に作戦を明かすことによって、結果的には夫に、ウエイカムの使用人になるという最大の屈辱をなめさせることになる。彼女はトムがマギーを家から追い出すと、自分も娘と共に家を出てゆく。作者によれば、それは愛情ゆえではなく彼女に残された唯一のものである「母性」に従っただけのことである。

夫のタリバーも、あまり褒めめられたものではない。ジョージ・エリオットは、前述のとおり、ベッシーが知性の点で夫より著しく劣ると書いているが、タリバー自身、とても知性的とは言えない(もつとも、そのタリバーよりはるかに頭が悪いと言うことによつて、ベッシーの馬鹿さ加減を表わさうとしたのかも知れないが)。タリバーは水利権をめぐる訴訟に取り憑かれており、物語ののっけから弁護士ウエイカムに対する敵意をむき出しにする。彼が息子の教育に大金をかける決心をするのも、純粹に息子のためを思うからではなく、トムをウエイカムに対抗できる人間にしたかったこと、水車場の跡を継げると自分が追い出されるかも知れぬ、というエゴイステイックな動機からである。

タリバーを支えるものはマニ教であり、彼の中には善か、悪かという考え方しか存在しない。「訳の分からん世の中

だ」という彼の口癖は、この世の中は二元教では解明できないことへのぼんやりとした意識を表わしている。タリバーは娘のマギーにはやさしい寛大な心を見せるが、ウエイカムという強大な敵に敗れると、そのやさしさを失ってゆく。彼は復讐の鬼と化し、そして一日も早く借金を返したいと願うあまり、守銭奴を思わせるような金に対する執着心を見せるようになる。結局タリバーはこの激しい復讐心が災いして死んでゆくが、息を引き取る間際になっても、ウエイカムを許してやってくださいというマギーの願いを頑として聞き入れない。

このタリバーに比べれば、ウエイカムの方がまだ増しだ。「かわかます」と「こい」の比喻によって鮮かに表わされているように、ウエイカムにとっては訴訟でタリバーを打ち負かすことなど、私情をはさむ余地のないビジネスに過ぎない。しかしタリバーの激しい憎しみを知らず、彼の心にもタリバーに対する憎しみが湧いてくる。この憎しみは、やがてドールコットミルを買取り、タリバーを自分の下で働かせることの動機となる。ここまでは両者の間にさしたる相違があるとも思えないが、ウエイカムが息子フィリップから、マギーと結婚したいと打ち明けられる

と、それは明らかになる。つまりウエイカムには自制心があることが分かってくる。マギーに会うと、彼は、タリバーの娘ではあるが息子の嫁になるかもしれないと思ひ、ぐっと自分を抑えて笑顔を見せる。

要するにジョージ、エリオットは、もっぱらタリバーのオブセション、パラノイア的性癖を強調する。確かに彼は娘マギーや妹ミゼズ・モスにやさしさを見せるし、その愛情は彼に、他の人物にない魅力を与えている。しかし、それよりはるかに強い印象を与えるものは、彼の復讐心であり、気前の良かった彼が金の亡者に変貌してゆく様、あるいは、彼の口癖が「この世はわしの手には負えぬ」という言葉に変わったことが示す絶望感、混沌の極に達した彼の価値観である。とりわけ彼の復讐にかける執念は、この作品における唯一のドラマティックな要素となっている点において重要であり、タリバーが息子に、ウエイカムに対する復讐の誓いを聖書に書かせる場面(Ⅲ・9)には、ぞつとするほど無気味な緊迫感にあふれている。この復讐劇は、やがて「ロモラ」の中で繰り広げられるカルボ・バルダサーレとティトー・メレマの熾烈な復讐劇へと発展してゆく点において興味深いし、ジョージ・エリオットが人間

の暗い執念を描くときにはすばらしい手腕を発揮することの予告であるとも言える。

話をもとに戻そう。以上のとおり、ジョージ・エリオットは、個々の登場人物に關してもっぱら暗く醜惡な面を描いていることを述べてきたが、同じ事は人々、という不特定多数の人間についても言える。タリバーの妹ミセス・モスは、この作品に現われるどの人物よりも善良でやさしい、従順な女性である。その夫は一日じゅう畑に出て牛馬のごとく黙々と働き続ける。それでいながら、この夫婦は貧しい、恵まれない生活を送っている。こういう彼らの姿と、裕福なドドン一族の姿との対比は、人間社会に対する作者の悲觀的な見方を感じさせる。このことはジョージ・エリオットが、「花婿も連れず、嫁入り道具も持たず」(Ⅷ・2)ひとりでセント・オググスに帰ってきたマギー・タリバーを冷やかに迎える「世間の女房」に目を転ずると、いっそう明白になる。この「世間の女房」を描く筆のタッチには痛烈な皮肉がこめられており、結果だけで判断し、そこに到る過程を思いやらないことへの絶望的な憤りが感じられる。「世間の女房」の描写には、ルイスとの同棲という表面的な事実だけしか見ないで批判を浴びせる世間に

対するジョージ・エリオットのにがにがしい心の内が、そのまま反映されている。

(前略)そして世間の女房は「社会」を守るために与えられた、優れた直感によって、ミス・タリバーの行動がもつともひどい種類のものであることを見て取った。こんないやらしいことがありませんか。お友達からあれほど恩を受けた娘が——しかも本人ばかりか母親までもデインさん一家からあれほどの親切を受けたながら——まるでお姉さんのように振舞ってくれた従姉妹から若い男性の愛を勝ち取るうと企むなんて、愛を勝ち取るですって？ タリバーのような娘にふさわしい言葉じゃございません。単に女とは思えない凶太さと劣情に動かされたとおっしゃいませ。あの娘にはいつだってうさん臭いところがあるんだから。噂では長年続いていたという例のウェイカムの息子との關係だつて、実にいやな感じですよ、つまり、むかむかしてきますわ。でもああいう性分の娘がやることとなるよねえ！——世間の女房にあっては、ミス・タリバーの体つきにすら、洗練された直感によって感じ取れるような、何か良からぬことをしてかす兆候が常に存

在していたことになってしまふのであった。(Ⅷ・2)

この「世間の女房」に対する作者の絶望感は、マギーを助ける唯一の可能性を託された牧師ドクター・ケンの敗北という形にもなって表われる。ケンとマギーの間には、一瞬にして共感という絆が結ばれる。ケンは慈善バザーが開かれた日、周りの華かさとは対照的に暗く沈んだマギーの表情に強く心を惹かれ彼女に話しかける。マギーは牧師の顔を見た瞬間、彼の心に苦しむ者への共感が存在することを感じ取る。これはまさしくジャネット・デンプスターとトリアン牧師の関係の繰り返しである。しかしトリアンがミルビーの町で最終的には勝利を収めるのに対し、ドクター・ケンはセント・オグスの精神的風土に負けてゆく。彼はけっして事態を甘く見ていたわけではない。それどころか、彼はマギーがセント・オグスに留まることが彼女に与える苦痛を憂え、町を出たほうが良いと忠告する。彼自身としても、マギーがステイブンと結婚するところが結局もつとも害の少ない道だと考える。しかし同時に、その結婚を神聖冒瀆と見なすマギーの良心を尊重し、情熱よりも過去との絆の方が強かったために彼女がひとりて帰ってきたことに理解を示す。彼には町の人間が本当の

意味での信仰心を持たないことが分かっていたし、マギーの苦しみを理解しない人間ほど彼女を忌み嫌うことを予測していた。

しかし、この冷静な判断と豊かな知性、共感を備えたドクター・ケンですら、実際に自分の前に立ち塞がる障害の大きさを予測できなかった。彼はマギーを助けようと努力して初めて、教区の人間のどうにも救いようのない状態が分かってくる。彼は人々の良心と理性に訴えようとするが、彼は突然、自分がまったく無力であることを知る。二十余年にわたる牧師の経験を持ちながら、彼は「セント・オグスの強情さ」にただただあきれられるばかりである。「セント・オグスの御婦人方」には、社会、というお気に入り、の抽象概念があり、それを口にするることによって、マギーを徹底的にけなし、マギーに背を向けることが味あわせてくれるエゴイズムの満足を正当化しているのだ。

「世間の女房」に対する作者の攻撃は、彼らの実体の、皮肉に満ちた暴露という形で執拗に続けられる。ケン牧師は、家を追われたマギーに自立の道を与えようと、彼女の職捜しに奔走する。しかし彼の努力はまったく報われな

い。ある母親は、「あんなこと」が言われ、「男性が冗談の

種にする」(Ⅶ・2)若い娘などには、たとえ一時的にせよ、子供の世話を頼むことはできないと断る。本を読んでくれる友達を欲しがっていたあるオールドミスは、マギーのような娘と少しでも係りを持つなんて以てのほかであり、「あれほどじろじろ見られ、ひそひそ囁かれて」ところにいつまでもいるとは、よほど「図太くて無神経な」娘に違いないと言う。ケンはやむなくマギーを自分の子供の家庭教師に雇うことにするが、マギーが仕事を見つけてほっとするのも束の間、今度はケンまでも下衆のかんぐりを受けることになる。

ジョージ・エリオットはセント・オググスの卑劣さを徹底させ、さらに結末を導くためには、どうしても必要な条件——マギーからこの世における救いをすべて奪い取ることを揃えるべく、ケン牧師が数週間前、妻に先立たれたという伏線を張っている。したがって町の男達は、当然のことのようにケンが過去にはこだわらず、マギーの「きれいな目を毎日見たがっている」(Ⅶ・4)ものと思う。女達は、牧師がマギーの手練手管にごまかされることを心配し、マギーはケンとの結婚を狙う「狡猾な女」だと噂する。ケンは「忌むべき見下げ果てた一般の感情」(Ⅶ・5)

に負けまいとするが、同時に、マギーを助けることが自分と教区民との不和の原因になっているという事実を認めないわけにはゆかない。彼は牧師という立場上、「低俗で粗野な心」が作り出すものであると「世間体」を無視できなくなる。結局彼は、町を出なさいという、最初と同じ忠告を繰り返さざるを得なくなる。

こうしてジョージ・エリオットは、個人のレベルと「世間の女房」という集団のレベルから、マギーを取り囲む人間の救い難い不毛な内をあらばいてゆく。一方、彼らに対する反感、嫌悪感は、彼らによって傷つけられ苦しめられるマギーへの憐憫を強める。このことは結末にはっきり表われてくるが、その前に作者は主人公からすべての望みを奪う。ケン牧師の敗北は、自分にはもはや住む場所もないのかという新たな悲しみと孤独感をマギーに与える。さらにステイブンの手紙は、克服したはずの誘惑を鮮明に蘇らせることによって、再び彼女の心に激しい葛藤を生み出す。マギーは苦しみのあまり死を願うが、この絶望の淵に立たされたマギーに対する作者のあわれみは、まずきわめてセンチメンタルなマギーの独白となって表われる。

「私はそれ『十字架』に耐える。死ぬまで耐える……」

も死が訪れるのは、なんと先のことだろう！ 私はこんなに若くて健康だ、どうしたら忍耐と力を得られるのだろう。またもがき、ころび、そして悔いるのか——私の人生にはまだ、同じようにつらい試練が待ちうけているのか（VII・5）

マギーがフロス川の氾濫に気付くのはこの直後であり、物語は一気にカタストロフィーを迎える。マギーは濁流の中をひとり小舟を漕ぎながら水車場へと向かう。そして首尾よく兄を助け出すことができる。一方、兄は、大きな危険をも顧みず、しかも自分のひどい仕打ちを受けながら、妹が自分を助けに来てくれたことに「人生の奥深さ」を悟る。そして一瞬にしてトムの心の目が開かれる。物語は、兄妹がしっかり抱き合ったまま、洪水の中に飲み込まれてゆくところで終わる。

この結末の甘さが自と伝わってくると思う。ゴルドエイウスの結び目を一刀両断した観のあるこの結末に多くの批判が浴びせられても不思議はない。ジョージ・エリオットは、この世では解決できなかったマギーのジレンマを、洪水によってあっさり解決しているが、問題は洪水が起きること自体ではない。洪水の描き方は現実という枠組から大

きく逸脱し、マギーとトムの描き方と幼年時代の美化は到底読者を納得させるものではない点が問題なのだ。結末全体は人物把握と現実の保証を放棄した、甘い発想に基づいて描かれ、ジョージ・エリオットが自分の感情をどうにも抑制できなかったことを示している。

読者は洪水に対しては、さしたる抵抗を覚えない。自然の災害という人力では抗し難い偶然の力によって、問題を一気に解決することは、昔からの常套手段である。その上、この作品にとりかかるに際してジョージ・エリオットが真っ先にやったことは、洪水の記録を調べることであったという事実が示すとおり、彼女は洪水に対しては周到な準備をしており、作品には洪水と溺死の暗示が数多く見られる。そもそも Flood という川の名前には、Flood（洪水）との頭韻がある。マギーの母は娘がいつか溺れ死ぬのではないかというオプセッションに取り憑かれており、少しでも娘の姿が見えないと、川で溺れたのではないかと心配する。ドールコウトミルには、持ち主が変わると川が怒り、洪水を起すすという言い伝えがあり、事実、水車場はタリバーの手からウェイカムの手にわたる。セント・オググスの守護神、聖オググの伝説は、洪水にまつわる伝説であ

る。将来、どう展開されてゆくか分からないマギーの運命は、満々と水をたたえた流れの早い「地図のない川」に喩えられる。フィリップ・ウェイカムは、うとうととまどろんだ時、マギーが足を滑らせ、滝の上からまっ逆さまに落ちてゆくのを何もできず見ている夢を見る。そして水車場のそばにあり、単に「丘」と呼ばれている、わずかに盛り上がった「取るに足らぬ」土地の描写は、川のわずかな増水が洪水を起こしそうな強い不安を読者に与える。

彼女「マギー」がセント・オグスへ行く必要のない時に、たびたび散歩した場所のひとつは、「丘」と呼ばれる所の反対側にあった——「丘」は木をいいたいだ取るに足らぬ小山であり、ドルコットミルの門の脇を通る道に沿って続いていた。私がそれを、取るに足らぬ、と呼んだのは、高さの点から言うとはほとんど堤と変わりなかったからだ。しかし、自然が単なる堤を、破壊的な結果を得るための手段とするような時があるかも知れないので、私は読者に、木をいいたいだこの高い堤が、四分の一マイルほどドルコットミルの左側に続いている様、さらさらと流れるリプル川に仕切られ、水車場のうしろにある快適な畑に沿って、

でこぼことした壁を成している様を想像して下さいと頼むのです。(V・1)

ジョージ・エリオットは、このような再三にわたる暗示によつて、洪水の可能性を読者の心に刻み込む。その結果、タイミングが良すぎるといふ印象は拭えないにせよ、読者には洪水に対する心構えは、ある程度できている。

しかし問題は、作者がマギーに対する憐憫に流され、洪水を神の恩寵として描いていること、兄妹の和解は作者の願望的思考の表われであり、まったく必然性を持たないこと、そして幼年時代が美化されていることだ。前述のとおり、作者は主人公を、死を願うところまで追い詰める。そしてマギーが現実に死を願うと、洪水を起こす。最後の第Ⅷ部が「最後の救い」と題されているように、洪水という大きな自然の災害は、神の救いとして描かれる。マギーが洪水に気付いた時から兄を助け出すまでの描写には、聖オグスの伝説との明白なパラレルがある。洪水の中で自分の舟が二そうとも無事であったことに對するボブ・ジェイキンの驚き——川辺に住み、「両棲類的」(I・6)と形容されるほど水に親しみ、川を知り尽したボブ・ジェイキンの驚き——は神の加護を感じさせる。マギーが氾濫したフロ

ス川の激流の中に押し流されながらも、ひとりでボートを漕ぎ、水車場にたどり着いて兄を助け出したことは、洪水があると必ず夕暮時、聖母マリアをへさきに乗せ、舟を漕ぐ姿が見られたという聖オググの訪れを思わせる。洪水がこのようなに扱われている以上、マギーの心には死に対する恐怖はまったくくない。あるのはただ「大きな静けさ」だけである。マギーの乗った小舟が川の激流に巻き込まれたときの描写は、マギーが安楽死を予想したという印象を与える。

最初の瞬間、マギーは自分がずっと恐れてきた生を突然通り過ぎたこと以外、何も感じなかったし何も考えていなかった。それは激痛を伴わぬ死の移行であった——そして彼女は暗闇の中で神とふたりきりであった。(VII・5)

作者はさらに、マギーが心安らかに死んでゆけるよう、兄との和解を実現させ、「苦痛にも等しい、神秘的で不思議」な幸福感を味わわせてやる。「最初の瞬間」が過ぎるとマギーの心に「昔の家」の光景が浮かぶ。そして「愛し続けてきた顔」が空しく助けを求めている様子を想像する。しかし、母と兄に対して使われたこの「愛し続けてきた」という形容辞は、いったい作品のどこから出てきた言

葉だろうか。この矛盾した言葉は、さらに、不自然な一節へとつながる。いつの間にか激流からはずれ、静かな流れの上を漂うマギーの全身に力が漲る。再びオールを取ると彼女は水車場に向かって舟を漕ぐ。マギーの力の源泉は、死と向かい合った時なら兄の許しを得られるかもしれないという漠然とした願望である。

人生のあらゆる人為的な覆が取り払われ、生きるというもっとも基本的な必要において我々すべてが心をひとつにする大きな災難を前にして、なお存続する仲間、冷酷、相互不信があり得るだろうか。マギーはほんやりとこのことを感じていた——のちのちの無情にして冷酷な非難、誤解をすべて押し流す、兄への強い愛が蘇ってくる中で。(同)

このマギーの願望は、そのまま作者自身の願望であり、死を目前にすることが、人の心から一瞬にしてそれまでのものもろの醜い感情を一扫し、純粋な愛だけを残すという、作品のコンテクストを無視した、あまりにも安易でセンチメンタルな設定に作者が抵抗を覚えなかったことは、マギーと自分との区別が彼女にはできなくなっていることを示している。さらにマギーに助けられたトムが一瞬にして道

徳的ビジョンを得る一節はそれにも増して不自然である。

水車場から小舟を押しやり、マギーと向かい合ったまま広大な水の上に出て初めて、起こったことの意味がいつきよにトムを襲った。彼はその力に圧倒された——それは、自分ではきわめて鋭敏にして明晰だと思っていた己の理解力を越えた人生の奥深さを、初めて彼の魂に教えるものであった——そのため彼はなにも尋ねることができなかった。ふたりは坐ったまま、なにも言わず見つめ合っていた。マギーは疲れ切った顔しながら、その目は強烈な生に満ちていた——トムはある種の畏敬と自らを恥じる気持で青ざめていた。彼の唇は動かなかったが、頭の中はめまぐるしく動いていた。そしてなにも問うことはできなかったが、神に守られた、奇跡にも近い努力の顛末を推測した。しかし、ついにその青みがかった灰色の目はかすかな涙に曇った、そして唇は話せる言葉を見出し出した——それは遠い幼年時代の言葉「マグジーノ」(同)ジョージ・エリオットの作品においては、確かに共感は一種の突然の靈感、直覚を通して得られる。共感に理屈、論理的思考を越えた存在であるからだが、この飛躍とも思

える共感への改宗に先立って、彼女は人物が徹底的に苦しむ姿を描く。共感に到達するためには何よりも苦悩の深淵を経験できるだけの感受性がなくてはならないからだ。ところがトムの場合、感受性の欠如、冷酷という面ばかりが強調され、道徳的進歩の可能性をまったく持たない人間として描かれてきた。アダム・ビードは、トムと同じように独善的で頑なであったが、彼には仕事を通して世の中に貢献したいという、愛他主義的願望があった。それに対し、トムの願望は虚栄心の満足をもたらすようなものでしかない。彼の心の目が瞬時にして開かれるのは、道徳的進歩と呼べるものではなく単なる飛躍であり、作者のひとり善がりではない。そして兄妹の最期を描くところになると、今度は極端にセンチメンタルな幼年時代の美化が見られる。

小舟は再び水面に現われた——しかし、すでに兄と妹は、二度と引き離されることのない抱擁をしたまま沈んでいた、最後の瞬間、仲良く小さな手をつなぎ、ひな菊の咲き乱れる野原をいっしょに足り回った日日を思い出しながら。(同)

この一節に描かれた幼年時代とジョージ・エリオットがこ

の作品の中ですでに語ったマギーの幼年時代との間には、なんの脈絡もない。彼女はマギーがトムによってどれほど傷つけられたかを描いたのであり、兄妹が「仲良く小さな手をつなぎ、ひな菊の咲き乱れる野原をいっしょに走り回った」姿など描かれてはいない。

「フロス河畔の水車場」が、こういう形で終っているのも、つまりはジョージ・エリオットがトムとマギーの和解を無理やり実現させていることが原因である。物語はそこに向かつて動いていないどころか、反対の方向に向かつて動いている。リーヴィスはこの結末を「白昼夢にふけるような」と形容している。正にそのとおりであり、兄妹の和解は作者の願望的思考の現われなのだ。ジョージ・エリオットの兄アイザックは、ハイトの「伝記」や「書簡集」を読む限り、トムのモデルというよりトムそのものという印象を与える。彼女はルイスとの同棲を兄に隠していたが、三年後、手紙で「私には夫があり、名前が変わった」ことを知らせた。妹から結婚を知らされるや、ただちに弁護士に二人の関係を調査させたアイザックは、「お前に関してはどうなることも確信できない」とマギーに言うトムの姿を彷彿させる。そしてルイスとの本当の関係を知らると、アイ

ザックは妹とのあらゆる接触を断ち、以後「氷のような沈黙」を守り続ける。ジョージ・エリオットはルイスが死んだ二年後の一八八〇年、五十九歳にして初めて正式な結婚をし、クロス夫人となるが、この時になってようやく——実際に二十三年ぶりに——兄の沈黙が破られる。と言ってもアイザックはごく型式的な祝辞を妹に送っただけであるが、しかしその祝辞はジョージ・エリオットを大いに喜ばせている。兄の許しを得たいという願望は、生涯彼女に付いてまわったわけである。ジョニー・クロスとの結婚を決意するに到る過程においても、おそらくこの願望が大きな要因となっていたと考えられる。兄との和解を絶望的にした姉クリッシーの死は、ジョージ・エリオットをいっそう願望的思考、白昼夢へと駆り立てたにちがいない。

幼年時代の美化という現象も、単なる感傷ではなく、この願望の表われだ。幼い頃なら兄妹喧嘩しても簡単に仲直りできるからである。物語が始まって間もなく、我々は次のような作者の解説に出くわす。

私達は歳とともに自分を抑えるようになる。仲違すと相手を避け、上品な言葉を使い、こうして威厳ある離間を保つ。一方は大きな落着きを見せ、他方は大

きな悲しみをぐっと飲み込みながら。(I・5)

「一方」と「他方」が各々誰を指すかは明らかであるが、このすぐ後に、まだ「動物の子」のようなトムとマギーが頬ずりをしながら、あっさりと呼直りする場面が続く。そうなるとう今の作者の解説には、彼女が幼年時代に帰りがついているようなニュアンスが感じられてくる。この印象は、同じ章を少し読み進んだだけで強められる。トムが休暇で学校から帰ってきた翌朝、兄妹は一緒に家の近くの「丸池」で釣をする。マギーは偶然大きな魚を釣り上げるが、喜んだトムは彼女を「マグジーノ」と呼ぶ。幼いマギーが兄の賞賛を得て、大きな幸せにひたる姿が見られる。「幸福な朝」の場面であるが、このあと次のような一節が続く。

彼らは走り、そしていっしょに坐った。彼らの心には、自分たちにとって人生が大きく変わってゆくだろうという思いはなかった。私たちは体が大きくなるだけで学校には行かない、だからいつも休暇みたいなんだ、私たちはいつもいっしょに暮らし、お互いを好んでいるんだ。(傍点・筆者)(同)

トムとマギーの心の中に見られる、この幼いままでいた

という願望、成長に対する拒絶反応は、実際には作者自身のものである。その証拠は、傍点で示したとおり、ここに来て突然トムとマギーの区別が作者から消え失せていることである。この現象はさらに続く。

実際にはトムとマギーにとって人生は変わっていった。しかし、最初の年月に抱いた思いや愛が、常に自分たちの人生を成すと信じた彼らは間違っていないか。た。(同)

トムとマギーの区別ができなくなると、九歳と十三歳の子供に、幼い頃の「思いや愛が、常に自分たちの人生の一部を成す」という認識があったかのような、きわめて不自然な陳述が生まれてくる。そしてまったく同じ現象が結末に再び見られるのだ。トムとマギーの区別なく、兄妹は「最後の一瞬」、同時にまったく同じ幼い頃の光景を思い浮かべているのである。マギーが兄から「マグジーノ」と呼ばれ、「苦痛にも等しい」幸福感を味うと、作者は両者の視点を混同してしまう。この結末における幼年時代の美化は、兄アイザックとの和解という願望をトムとマギーの和解によって実現しながらも、そのためには彼ら二人を犠牲にしなければならなかったジョージ・エリオットの心の中

に、和解がもつと簡単に実現できた幼年時代に戻りたいという願望が潜んでいたことを示すと云える。

しかし幼年時代は常に美化されているわけではない。それどころか、この作品の基調が苦痛であるように、マギーの幼年時代は苦痛に満たされている。だからこそ突然姿を見せる幼年時代の美化はいっそう不自然なのだ。

以上、「フロス河畔の水車場」の結末に見られるいくつかの問題点について述べてみた。結局、この現実の保証を犠牲にした、矛盾に満ちた結末をもたらしている原因は、マギーに対する憐憫に作者が流されていることであり、さらに作者の中に存在したアイザックへの強い憎しみ・反撥と、それに劣らず激しい兄の愛を求める気持——兄に対するアンビヴァレンス——を彼女が客観的に見ることができなかった、と言うより、その存在を十分認識していなかったことであろう。この結果を最初から意図しておきながら、彼女がトムを描く調子を和らげることができず、逆に批判的調子を強めていった原因がここにもある。兄に対する感情は、ほとぼりのさめた感情ではなかった。ジョージ・エリオットは、言わば十分に消化されていない題材——デイタッチメントは不可能な題材——をこの作品で扱ったの

である。

以上、ネガティブな調子に支配された人物描写や、いくつかの重大な問題を孕んだ結末について述べてきた。しかし「フロス河畔の水車場」が古典の傑作に仲間入りしてきただことは事実であり、それはおそらく九歳から十三歳にいたるマギーの描写、つまり作品の前半に負うているように思われる。幼いマギーと、彼女を中心に描かれるドールコットミルでの生活は魅力的な一面を持っている。十三歳のマギーの苦悩は読者の胸に迫る迫真性があり、この作品においてはおもつともよくできた部分である。だが幼いマギーの描写には、アイザックに対する作者の隠れた感情が暗い影を落としている。さらに十七歳のマギー、十九歳のマギーの描写にもいくつ問題点が見られるのだ。それでは次に——順序は後先になったが——作品の前半と、主人公マギーについて述べてみたい。

物語の出だしは、どうにも抑制の効かない結末とは比較にならないほど、すばらしい出来である。ジョージ・エリオットはまずフロス川やセント・オッグス、リプル川を一眺できる所に立ち、そこから徐々に視野を狭めてゆく。こ

の作品を初めて読む読者は、ややもするとフロス、セント・オググス、リプル、そしてドールコットという音の響きの良さにつられてこの自然描写を読み流してしまふ。しかし再読する読者には、そこにさまざまな意味がこめられていることに気づく。例えば冒頭のフロス川の描写は、やがてマギーの中で展開される、衝動と、それを抑えようとする理性との対立を暗示する。

緑の堤に挟まれながら徐々に幅を広げてゆくフロス川は、海と、自分を迎えようと大急ぎでやってくる愛に満ちた潮に向かって、広々とした平野を足早に流れどくるが、平野は激しい抱擁によってその流れを抑えている。(I・1)

さまざまな品物を満載した船がセント・オググスに向かう様子や、フロス川に沿ってはるかかなたにまで続く「豊かな牧草地や、幅の広い葉を持つ葉菜の種を植えようと掘り起こしてあったり、秋に種を蒔いた、柔らかな葉をした穀物に色づく黒い畑」は、一見、この作品が明るい調子を持つかのような錯覚を与えるが、やがてこの自然の恩恵と物質的豊かさを表わす描写には、セント・オググスの人間やドドソンの心の中が不毛であることに對する批判がこめ

られていることに気付く。

「愛に溢れる耳の聞こえない人の声」に喩えられるリプル川の「低いおだやかな声」は、マギーの思考を麻痺させ、彼女に「義務の声」を聞こえなくさせるステイブンの甘い誘惑を思わせる。遠景から視野を狭め、ドールコットの描写になると、それまで見えていた「二月の太陽の束の間の眼ざし」は消え、「雲行きが怪しく」なる。そして「川は溢れんばかりに水をたたえながら、この小さなこりやなぎの植込みの中を勢よく流れ、家の前のささやかな牧草地を縁どる草を濡れさせんばかりであった」と続く。ドールコットミルをおそう悲劇、そして結末の洪水を暗示していることは明らかである。

作者の目に九歳のマギーの姿が映る。マギーはじっとたたずんだまま、魅せられたように、「休みなく回る水車がダイヤモンドのような水しぶきを上げている」のを見つめている。作品には、この、高く上がっては勢よく落ちてくる水車の動きに見入っている幼いマギーの姿を彷彿させる言葉が出てくる。例えば――

彼女「マギー」はあまりにも高く飛ぼうとしては下に落ち、まだ生えそろわぬあわねな小さい翼を泥につけ

てしまった。(IV・3)

彼女は、その時は自分が偉大なる征服を成し、地上の誘惑や争いを見おろす静かな高台に永遠の足場を築いたと思った。ところが彼女は再び自分の情熱と他人の情熱との熱い抗争のまっただ中に落ちていた。(V・5) さらにドクター・ケンがマギーの苦悩を敏感に感じ取り、心の中でつぶやく言葉も同様である。

「あの娘は心に何か悩みを持っているな」彼は思った。「かわいそうに！ もしかすると

生まれながらにしてあまりにも高すぎるため苦悩によってあまりにも低いところに突き落とされる魂

を持っていかねない人のように見える。(後略)」(VI・9)

物語が本題に入ると、作者はマギーを中心に、ドールコットミルで繰り広げられる日常生活をゆっくりと描いてゆく。そして細かな事柄を丹念に積み重ねることによって読者の印象を徐々に固めてゆく。マギーとルーシーが対比され、きれいにカールのかかるルーシーの金髪が、すべてにおいて従順で、こじんまりとまとまっています、『制約』に満

ちたドドソン一族の模範的な娘であることの象徴として使われているなら、カールのかからない、言うことを聞かぬまっすぐな堅い黒髪はその逆の象徴なのだ。頭が良く、想像力に富み感受性豊かなマギーは、彼女が置かれた世界の中では例外的な存在であり、このことは髪と色が黒いことによって象徴される。ドドソンの血を引く母やおば連中は、何かにつけ、金髪で色白なルーシーを引き合いに出し、マギーに批判を浴びせる。

作者はさらに髪にまつわるエピソードを描き、ドドソンに対するマギーの反撥と彼女の衝動的な面を明らかにする。雨を理由に、トムを学校まで迎えに行くことを禁じられたマギーは、母がカールをかけてやるうとすると自分で頭を水につけてしまう。おばのひとり、マギーの肌の色が黒く見えるのは、髪が多すぎるからだと言えば、彼女はハサミを持ち出し、自分で勝手に髪を切ってしまう。

作者はマギーが例外的な存在であることを読者に示しながら、同時にその中で彼女の運命をも巧みに暗示する。父は娘を「女にしては頭が良すぎる」「尻尾の長い羊だ」(I・2)と評する。「知性においては自分より著しく劣るが、かわいらしい女房」(I・3)を持つことに満足し切った男

が、市場に出しても買手がつかないことを心配して使ったこの比喩だけではさしたる効果もない。しかし、愚かと言えば母が娘を「おかしな子」と呼び、浅黒い肌を指して「ジブシーのようだ」と形容したり、作者自らマギーを「自然のささやかな失敗」と呼んだり、さらには「耳の垂下がったうさぎ」に餌をやり忘れ、死なせてしまったマギーを慰めようと、ドールコットミルで働くルークが「自然から外れたものは栄えん、神様がお嫌いになるんだ」(I・4)と言う——そうなると、ひとつひとつは互いに相乗効果を発揮しあい、読者に、マギーの行く末に対する不吉な予感を抱かせる。

しかし、幼いマギーを描く第一部においても読者の印象に残ることは、前述のとおり、トムがマギーに与える苦痛である。作者はまず、父が客に向かって口にしたトムという名を聞きつけたマギーの反応を通して、兄に対するマギーの愛情を描く。

マギーが本を読みながら空想に耽っている時に彼女の注意を引く音はほとんどなかったが、トムの名前だけほんともかん高い口笛と同じ効果を持っていた。たちまち彼女は目を輝かせ、トムに危害を加えられるの

ではないかと疑っている、あるいは危害を加えようとする奴には、誰であろうと絶対に飛びかかってやると決意したスカイ・テリヤのように油断なく身構えた。

(I・3)

マギーは久し振りに兄に会えたりれしきで胸が一杯になるが、その幸福感は間もなく「胸が押しつぶされそうなみじめな気持」に変わる。マギーが「耳の垂下がったうさぎ」に餌をやり忘れ、死なせてしまったことを知ったトムが妹をきびしく罰したからである。

「なんて兄さんは残酷なんだ！」マギーは大声でしゃくり上げ、細長い空っぽの屋根裏部屋に響き渡るうろろな反響に、みじめなよろこびを見出し出した。彼女はうさ晴らしに使う人形をたたいたり、踏みつけたりするとは考えなかった。怒ることができないほどみじめな気持だった。(I・5)

兄に傷つけられたこのマギーの悲しみ、みじめな気持こそ彼女の幼年時代の基調である。このすぐあとに続く作者の解説は、いっそうこの印象を強める。

悲しみがすべて新らしく未知であり、希望はまだ遠い日目を越えて飛ぶ翼を持たず、そのため夏から夏の空

間が果てしなく続くと思える幼年時代のこの激しい悲しみよ!

自分で髪を切ってしまったマギーは、兄の嘲笑と「おれたちが学校でくるみの殻を投げつけてやるうすのろそっくりだ」(I・7)というあざけりの言葉に「思わぬ心の痛み」を感じる。自分の言葉が妹に与えた苦痛など意に介さぬトムは、さっさと下に降りてゆく。あとに残されたマギーは「彼女の小さな魂が毎日のように味わう、あの取り返しつかないことをしてしまったというつらい気持」に苛まされる。作者は幼い頃の悲しみがどれほどつらいものであるかという一般的な解説を加えたあと、マギーの心の内を次のように描く。

ああ、なんてひどい! トムはとても冷酷で無関心だ。もし兄さんが床の上で泣いていたら、私もいっしょに泣いただろうに。それに下にはおいしい夕食があり、私はこんなに空腹だ。とてもつらい。(傍点・エリオット)

そして幼年時代のマギーの描写は、再び兄の思いやりのない言葉に傷ついたマギーが泣きながら寝入る姿で幕を閉じる。

要するにマギーは知性、感受性、想像力とも豊かであるが、同時に感情の振幅が大きく、衝動的な面も強い娘であり、一方トムは、他人に対する思いやりを持たず、過を犯した者には容赦なく罰を与えるが、相手がどれほど傷つくかを感じないため、罰を与えてもまったく心乱されることなく、自分は正しいことをしたと思いつける少年として描かれる。作者はこの複雑、多感なマギーが強い愛する力と「愛される必要」の対象をひたすら、愛する力もなければ「愛される必要」も感じない、単純、鈍感、独善に満たされた兄トムに求めたために、マギーが常に一方的に傷つけられるという描き方をする。

しかし、読者はこういう描き方にある種の抵抗を覚えざるを得ない。それはまず第一に、作者が心情的にマギーに傾きすぎているという印象を与える。マギーの描写になるとジョージ・エリオットは「愛される必要、それはあわれなマギーの性格の中でもっとも強い必要」(I・5)(傍点・筆者)とつい余計な修飾語を付けてしまう。兄妹の間で交される次の会話も、この傾斜を示す例である。

「わあ、兄さんて勇敢ねえ! サムソンみたい。もしライオンが私に襲いかかってきたら戦ってくれるでし

よ、トム」

「馬鹿だなあ、どうしてライオンがお前に襲いかかったりするんだ。ライオンなんか見せ物だけにしかいやしないよ」

「そりゃそうだけど、でも、もしライオンの国にいたとしたら——アフリカよ、とても暑い——ライオンが人間を食べちゃうところよ。私が読んだ本に書いてあったから見せて上げる」

「そうだなあ、鉄砲で撃ってやるか」

「でも、もし鉄砲を持ってなかったら——考えなしに外に出たかも知れないでしょ——ちやうど釣に行くみたいに。そうしたら大きなライオンが吠えながら私たちの方に走ってきて、二人とも逃げられなくなることであってあり得るわ。兄さん、どうする」

トムは立ち止まったが、ついに軽蔑の表情を浮かべ、プイと横を向いて言った。

「だけどライオンなんか向かってこないじゃないか。話だけじゃなんにもなりやしないよ」

「でも私はどうなるか想像したいのよ」マギーは兄のあとについて行った。「兄さんだったらどうするか考

えて」

「うるさいなあ、マギー、ほんとに馬鹿な奴だよ、お前は——おれ、うさぎを見てくるよ」(I・5)

この会話における作者の意図は明らかである。サムソンとライオンが結びつかないトムの無知、マギーのロマンティックな空想力、トムにはそれがなく、彼が現実の枠の中でしか考えられないこと、を示すことだ。しかし、マギーに見せたトムの反応は、十三歳の少年のごく当たり前の反応であり、たわいないマギーの空想に調子を合わせることで、方が不自然である。気持がマギーに傾斜しているために、作者はこの点に気づいていない。またマギーの描写に時として見られるきわめて大仰な表現もこの表われである。いつも身ぎれいに行っているルーシーが、突然泥だらけになって帰ってくることを説明するためには、三人の子供達が外に遊びに行き、そして

その日の朝、マギーの心を捉えた小さな悪魔が、しばらくくらくらなくなったかと思うと、前よりもいっそう大きな力を蓄えて帰ってきた

時に戻らなければならぬ、と作者は述べる(I・10)。その説明の中でマギーは「蛇を切り落とされた小さなメデュー

「サ」に喩えられる。作者が言いたいことは、要するにトムがルーシーばかり可愛がることに腹を立てたマギーが、ルーシーを泥の中に突き倒しただけのことであるが、それは次のように描かれる。

もし悲劇が激情によってのみ作られるとすれば、その瞬間、悲劇を作り出せたような激情がマギーの中で葛藤していた。しかし激情に内在する本質的な高潔さは、その行為には欠けていた——マギーがその小さな褐色の腕を激しく突き出すことによってできた最大限のことと言えは、あわれな小さい、ピンクと白の服を着たルーシーを、牛に踏みつけられた泥の中に突き倒すことであつた。(同)

しかしこうしたことより重大な問題が、第I部におけるマギーの描写に潜んでいる。確かに兄妹の間における愛情の流れ方は一方的であり、常にマギーが一方的に傷つくかも知れないが、そもそもトムがマギーに腹を立て敵しく罰する原因をもたらずものは、ほとんどの場合、マギーがうっかりやってしまうことである。作者はそれがマギーの衝動性、「忘れっぽさ」、「不器用」のせいであるかのようには言うが、読者にはそうとは思えない。マギーがこの作品の

中で初めてトムの怒りを受ける原因は、学校に行っている間世話をしてくれと兄に頼まれた、そして兄が有り金すべてをはたいて買った「耳の垂下がったうさぎと斑の雌うさぎ」にうっかり、餌をやり忘れ、死なせてしまったことである。しかしマギーはルークがオランダ人に対する偏見を口にすれば、オランダ人と言えども同じ人間だと言ひ共感を示す。兄と釣に出かければ、釣針に刺される虫の苦痛を思いやるほどの感受性を示す。マギーがトムのうさぎに餌をやり忘れたことには、単なる「忘れっぽさ」以上の動機が潜んでいるように思えてくる。

この印象はトムとマギーがルーシーと共におじブレットの家を訪れる場面で強まる。三人はカードを使って家を作る。手先の器用なルーシーは上手にカードを積み重ねるが、無器用なマギーはうまく作れず、カードはすぐに崩れてしまう。トムがマギーをあざ笑い、馬鹿だと呼ぶと彼女はカッとなる。そういうマギーを見てトムは「お前よりルーシーの方が好きだ。ルーシーが妹だったらなあ」(I・9)と言うが、その言葉を聞くとマギーは急に立ち上がる。そしてトムが作った「すばらしい塔」をうっかりこわしてしまふ。トムはとたんに冷やかになる。オルゴールの奏でる

音楽にうっとりしたマギーは、感激のあまり兄に抱きつき、トムが飲もうとしたカウスリップのワインを半分こぼしてしまふ。そして兄を怒らせる。

マギーが、兄を傷つけ怒らせる意図を持たず、うっかりやってしまう行為が結果的に兄を怒らせるといふ現象は、幼年時代に限ったことではない。思春期に入ったマギーは二度にわたって兄を激怒させる。一度目はフィリップ・ウェイカムとの逢引きが兄にばれた時であり、二度目はステイブンと駆け落ちした時であるが、重要なのはマギーがトムを怒らせる時期である。トムが妹とフィリップの逢引きを知るのは、彼が苦勞の末、父の借金をすべて返済できる少し前、正確にはその三週間前であり、マギーがステイブンと駆け落ちするのは、ドルコットミルをウェイカムから取り戻すという、長年の悲願を叶え、トムが水車場の主人となった直後である。つまりいずれの場合も、トムを激怒させるマギーの行為は、長くつらい苦勞がようやく報われたという満足感、充実感をトムが味わおうとする矢先、それに冷水を浴びせるような形でなされている。トムが家の借金を返済できることを父に告げた時、彼は「二度と味わうことのない甘美な瞬間」(V・9)を味わってはい

るが、そこには満ちたりた、幸福そうな父親の姿があったからだ。しかし水車場を取り戻したトムの心にはなんの満足感もない。

ステイブンとマギーがセント・オグスを去った日から五日目の午後四時から五時の間、トム・タリバーはドルコットミルの古い家の外にある砂利道に立っていた。彼は今やその主人であった。(後略)

しかし、その夏の日の午後のまだ強い日射を浴びて立つトムの顔には、うれしそうに、勝ち誇った表情はまったくなかった。日射を避けようと帽子をさらに深くかぶり、両手をポケットに深く突っ込むと砂利の上を行ったり来たりしはじめた彼の口もとには苦り切った表情が浮かび、厳しさをたたえた額には、ことさら厳しい深い皺が刻まれていた。(VII・1)

読者はこうしたマギーの行為、トムの怒らせ方の中に、はっきりと兄に対する憎しみ、敵意、兄を傷つけたいという願望の存在を感じる。しかしジョージ・エリオットは、絶対にその存在を認めようとしなない。彼女はトムを怒らせるマギーのうっかりやってしまう行為の奥に潜む動機の分析は絶対にやろうとせず、ただトムの怒りにマギーが傷つ

き悲しみ、そしてみじめな気持ちになったとしか描かない。彼女はただ、マギーは兄を愛しながら——愛するからこそ——兄の怒りを何よりも恐れ、と言っただけであり、憎しみの存在を認めない代りに恐怖を表に出して行く。このことはジョージ・エリオット自身が、兄を傷つけたいというマギーの無意識の願望を十分認識していなかった——と言うことはつまり、トムを怒らせ傷つけるマギーの行為は、実は作者自身の潜在意識に存在した願望の表われであると言えないだろうか。作者の心のどこかに、自分を頑として許さないアイザックを傷つけたいという願望が存在した、しかしそれを意識の表面に出すまいとする心理的メカニズムが働いていたために、彼女自身、その願望に気づかなかつたように思われる。トムを怒らせるマギーの行為、それがなされるタイミングは、ジョージ・エリオット自身の無意識の願望の表われであり、その動機がまったく欠けていることの原因であるように思える。それを分析することは、作者自身の中にあるアイザックに対するアンビヴァレンスの存在を認めることになる。ジョージ・エリオットは、自分はただひたすら兄を愛し続けたのであり、ネガティブな要素は恐怖しかなかったと思いたかったに違いない。

い。この願望が兄に対する憎しみを意識下に追いやったのではなからうか。トムに対するマギーの感情は、作者が客観的に見るにはあまりにも生々しい題材であったという結論を再び繰り返させてもらう。

九歳のマギーに対し、十三歳のマギーの描写は、はるかによく出来ている。理由は明白である。マギーを苦しめるのはトムではないからだ。ジョージ・エリオットはまだ十分に幼さを残す、思春期に入ったばかりのマギーがトマス・ア・ケンピスに触れ、「ぞくぞくするような不思議な畏敬」(IV・3)を感じ、遠い中世からこの僧侶が説く「自己放棄」——自らの欲望を捨て去ること——に「幸福への鍵」を見い出す過程をあざやかに描き出し、父タリバーの執念とはまったく異質の迫力をもって語ってゆく。そこには二十七年前の自らの苦悩がはつきりと映し出されているが、けっして自己憐憫に流されることはない。作者は主人公に憐憫を寄せながらも、客観的な視点を保っている。十三歳のマギーの描写は迫力と深みを持ち、作者が自分を描くことの強みを十分に感じさせる。この作品の中ではもつともよく出来ている部分である。

マギーを苦しめるものは、潤いがすべて跡形もなく消え

失せた暗く陰気な家庭である。破産した父は、怪我がもとで意識が朦朧としたまま寝込んでいる。「低能な」母はただおろおろとし、自分の旧姓が入ったリネンや陶器が町中に散らばることはかり心配する。そして子供の前で愚痴をこぼし、夫を咎める。トムはこんな母を慰めるが、マギーは母に激しい怒りを覚える。表向きは彼らを助けようと集まってきたおじやおばは、結局、家族の前でタリバーを批難するだけである。タイバーとドドソン、マギーとトムの相違が顕著に現われる場面である。ミセズ・グレッグは助けてもらう前に謙虚に助けを乞うことを要求するが、それは誇り高いタリバーには絶対にできないことである。タリバーの血を引く、そして他人の批判には人一倍神経質なマギーが怒りを爆発させてしまうのは当然だ。しかしドドソンの血を引くトムはマギーの自制心の欠如に苛立つ。現実のレベルでしか考えられないトムには、現実をしつかり見つめ、状況を冷静に判断できる強味がある。タリバーの先祖をたどってゆくと「すばらしく頭は良かったが身を滅ぼした」(IV・1)ラルフ・タリバーに行き着くが、ドドソンにはそんな者は誰一人いないのだ。マギーがトムとの間の溝に気づいても不思議ではない。マギーはなまじ知性や感

受性、想像力を持つために、内と外の軋轢に苦しめられるのだ。

茶色のフロックに身を包み、目を涙で赤く染め、豊かな髪をうしろで束ねたまま、父が寝ているベッドから自分の世界の中心であるこのもの悲しい部屋のくすんだ壁に目を移すマギーは、美しく喜ばしいものすべてに対する激しい、情熱的なあこがれに満たされた娘であった——すべての知識を欲し、徐々に消えてゆき二度と戻らぬほんやりした音色を捉えようと耳を澄まし、この神秘的な人生のすばらしい印象をひとつに繋ぎ合わせてくれ、そこに自分の住む所があることを思わせてくれるような何かを、盲目的に、無意識に追い求める娘であった。

内と外の間これだけの相違があれば、苦痛に満ちた軋轢がそこから生ずることになんの不思議があらうか。(III・5)

エディプスに喩えられた父タリバー(I・13)は、自分の意志の弱さからではなく、妻の愚かさという外的事実がそれを上回るために、彼がもっとも忌み嫌う事態へと陥ってゆき、もはや戦意を喪失してしまうほどの苦境に落ち

る。すでに引き裂かれた巢に、今度はいばらの棘が刺し込まれる。マギーの置かれた小さな世界は一段と暗さを増し、マギーの苦痛は強まる。母は子供のようにはだらしなくなり、ただ茫然となつたままだ。母に残されたものはただ母性だけであり、今まで叱りつけてばかりいたマギーに心使いを見せるのも、この本能の命ずるところに従っているからである。こういう母を見るにつけ、マギーは昔の母の方がまだましだったと思う。しかし押し黙つたまま、暗い表情を変えない父の姿にマギーはどうにも耐えられない気持ちになる。マギーが母やおばに叱られれば常にかばってくれ、やさしい心で娘の傷を癒してくれた父は、今は物も言わずただひとつのことを思い詰めている。気前のよかつた父は「わずかなものにすら目を光らせるけちんぼ」(Ⅳ・2)に変わりつつある。

マギーが、父を愛する娘がいることをいくら伝えようとしても、この父の心には浸透してゆかない。女であるがゆえに、兄のように外に出て家の再建に情熱を燃やす道を塞がれたマギーは両親と三人きりで家の中に閉じ込められる。陰うつで潤いのない単調な毎日を通すマギーの心の中では、春が深まり自然が明るさを増すにつれ、孤独感が

強まり、自分の人生からはすべてが奪われたと感ずる。兄は帰宅してもマギーの心の内にはまったく無関心である。

作者は結末に近いところで、トムのマギーに対する「嫌悪感」は「幼い頃小さな指をしつかり絡ませた時の愛と、その後、共通の義務と共通の悲しみの中で感じた親近感」(Ⅶ・3)から激しさを得ていると言うが、兄妹の間には「親近感」などまったく存在しないのだ。

マギーはスコットの小説とバイロンの詩をすべて読めたらと思うが、同時に九歳の時には効き目のあつた空想という麻薬がもはや効力を失つてを知っている。十三歳にしてマギーは己の心を圧することの重みは一体なんなのかを分からせてくれる鍵を求める。彼女はその鍵をまず「男性に満足と生きる喜びを与えた知識」(Ⅳ・3)に求める。家財を競売に付されたあとに残された本と言えはトムのラテン語とユークリッドと論理学の教科書だけである。そんなものでもマギーは鍵を求めて読み耽る。しかし男性の知識が与えたものは、自分の理解力は男性のそれに負けないという束の間の自惚だけである。美しい自然の中でオールドリッチを読んでみるが、現実の世界とあまりにもか

ケンピスに触れる直前のマギーの心——情熱は燃焼の対象を与えられず、自己憐憫の中でくすぶっている状態——を作者はこう描く。

かわいそうな子！窓枠に頭をもたれ、握り合わせた両手にまします力をこめ、足で床をたたきながら彼女は、自分が、不可避な戦いの訓練を受けぬ心を持ったまま学校時代を終えた、当時の文明社会の中のだひとり娘であるかのように、苦惱の中で孤独感を味わった——血のにじむような努力によって獲得され、何世代にもわたる苦痛に満ちた努力が人類のために貯えてきた思考の宝のうち、彼女が受け継いだ部分と言え——お粗末な文学と誤った歴史の断片と切れはしだけ——サクソンや模範とするには疑わしい他の王に関する無益な知識だけはたくさん持つが、不幸にして、習慣を支配すれば道徳となり、従順と依存の感情を啓発すれば宗教となる、彼女の内外のくつがえすことのできぬ法則に関する知識はまったく持っていなかった——彼女は自分以外の娘はすべて、要求は強く、衝動は激しかった若い頃の自分を忘れぬ目上の人に大切にされ、見守られているかのように苦惱の中で孤独感を

味わった。(IV・3)

ジョージ・エリオットは「己を愛する心がこの世の何よりも汝を傷つけることを知れ」「己を捨てよ、されば大なる心の安らぎを得ん」と説くトマス・ア・ケンピスの言葉に触れたマギーの感動を熱っぽく描いてゆく。マギーの感動は、他人をうらやみ、自分の運命を嫌悪し、そして発作的に父や母、兄を憎むあまり自分が悪魔になるのは難しいことではないと恐れるほどエゴイスティックな状態にあったことの自覚、それに対する反省、そして視点を己の外に移し「己の人生を、神に導かれた全体の些細な一部」と見なすことに「幸福への鍵」を発見したよろこびを意味する。

この感動を境にマギーはエゴイズムから「自己放棄」へという、突然の激しい動きを見せる。彼女は極端な禁欲生活に入り、装飾品を一切身に着けず、鏡も見なくなる。知識欲も捨て、読む本は聖書とトマス・ア・ケンピス、教会暦年の三冊だけとなる。それはいかにもマギーらしい動である。衝動的で極端なことをする傾向、しかも母がカールをかけてやろうとすればトムを迎えに行かせてもらえなかった腹いせに自分の髪を水につけたり、おばに対する反撥

から自分で自分の髪を切ってしまったように、時として自虐的な衝動を見せる傾向、さらには空想という麻薬を使ったり、母やお婆の非難を浴びる苦痛を思い家出したこと、スコットのもとに逃げ出したいと思うことなどに表われた苦痛からの逃避という傾向——こうした傾向を持つマギーが、情熱のはけ口を塞がれ苦悩の中に閉じ込められた時、自らの意志によって自らの神経を麻痺させる「自己放棄」の道を取っても不思議はない。

さらにジョージ・エリオットはマギーの「自己放棄」には、多分に、思春期特有の自己劇化の傾向があることも指摘する。彼女にとって、自分の人生はドラマであり、自分の役を強烈に演ずることを自らに要求しているのだ。自分ではエゴイズムを捨てた気になっても、実際には自分の禁欲生活を人に見せ、賞賛を得たいという気持は彼女に残っている。強いて行く必要もないのにセント・オッグスへわざわざ出かけて行くのもそのせいである。町に行つたことを兄に咎められると、兄の冷酷は自分に課せられた十字架のひとつであると思ひ、何も言わず甘んじて受ける努力をする。しかしそこには自分の正しさを信じつつ相手の間違い、過を我慢するという微妙な優越感が感じられ

る。したがって作者は十三歳のマギーが歩み始めた道は「寛大、正しい斟酌、自己批判の険しい本道」ではなく、「やしな枝を伸ばす殉教と忍耐の道」であることを示唆する。

そしてマギーの「自己放棄」においてもっとも重要なことは、マギーは自分が捨て去つたつもりでいる欲望の正体をまだ知らないことである。だからこそ彼女は「自己放棄」の道を取れたのであり、やがてマギーは、殺そうとしても殺すことのできない欲望のために、もはや「自己放棄」は不可能であることを悟る。作者の視点を与えられたフィリップは、十七歳のマギーに彼女の「自己放棄」が実際にはどのようなものであるかを知らしめる。

このようにジョージ・エリオットは十三歳のマギーにわれみを寄せながらも一定の距離を失うことなく、マギーの苦悩と「自己放棄」に到る過程を描いてゆく。禁欲生活に入ったマギーを描く最後のところに出てくる次の一節は、作者自身が一瞬、マギーの姿に見惚れているかのような印象を与えるが、実際にはマギーが美しい女に成長することを暗示するものである。

頭を垂れ、せつせと縫い物をするマギーは誰が見て

もうれしさを覚えたかも知れない光景だった。彼女の新たな心の内は、閉じ込められた情熱が時折火のように吹き出てきたにもかかわらず、やわらかな光を伴って彼女の顔に溢れ出ていた。その光は花開こうとしている若いマギーの、ゆっくりと美しさを増す肌の色と輪郭に混ざり合い、いっそう彼女を美しく見せた。

(IV・3)

事実、四年後十七歳になって物語に登場するマギーの外見描写では、彼女の魅力が強調される。作者はまずマギーが年齢より大人びて見える点を掲げるが、それは「おだやかな、あきらめたような悲しみをたたえた視線」ゆえか、あるいは「胸幅の広い姿」が年齢以上の女らしさを持つからかも知れない、と曖昧な言い方をする。しかしそれに続く一節は、その理由が後者であることを明確にする。そして「目は潤み、褐色の頬は引きしまったふくよかさを持ち、ふっくらした唇は赤い」という言葉からマギーのなまめかしさ、官能性が読者に伝わってくる。色は浅黒く、まっ黒な髪を持ち背の高いマギーは堂々としたアカマツのそばに立っているが、彼女はそのアカマツをこよなく愛するかのように見上げている。アカマツはいかにも男性性器を

思わせる。かくして十七歳のマギーの外見描写には性のイメージが強く、マギーの性的魅力と性へのあこがれを読者に印象づける。ジョージ・エリオットはさらに次のように続ける。

しかし人は彼女を見る時、不安な気持——彼女の中に対立する要素があり、両者の衝突が差し迫っていると
いう気持——を抱く。(V・1)

マギーを一見して対立要素の存在と両者の葛藤が間近いことを読み取れるかのような描き方をするこの一文は、マギーと作者との距離が再び狭まったことを思わせるが、同時にマギーがやがて性の欲望に悩まされるであろうということをも暗示している。

物語にはフィリップ・ウェイカムが再び登場し、マギーは「赤い谷」で彼と一年近く逢引きを続けることになるが、このフィリップとの関係において描かれる十七歳のマギーは知性的な面をまったく感じさせないばかりか、きわめて曖昧である。以下その点について述べてみたい。

前述の通り、作者はフィリップにマギーの「自己放棄」、自己否定の正体を彼女に分からせる役割を課している。フィリップとマギーの会話は、作者が、十七歳の自分と話し

ているかのような印象を与える。しかしフィリップの言葉には、けつしてマギーを教え諭そうとするようなところはない。彼はあくまでも、マギーの自己否定が自分の願望の妨げとなっているからというエゴイスティックな理由でそれを止めさせようとする。自分に少しでもよろこびを感じさせるものをすべて締め出し、現在の運命に閉じ込めようとするマギーに彼は必死になってこう言う。

「〔前略〕君は狭い自己欺瞞的な狂信の中に自分を閉じ込めているんだ、君の心にあるもつとも気高い力のすべてを飢餓によって鈍らせ、苦痛から逃げているに過ぎないんだ。よろこびや安らぎはあきらめとは違う。あきらめというのは和らぐことのない——和らぐことは期待しない——苦痛によるこんで耐えることなんだ。麻痺はあきらめじゃない。無知のままにいては——他の人の人生を知れるすべての道を塞ぐことは——麻痺だ。私はあきらめを学んではいけない、その教えを学べるほど人生が長いとは思っていない。君だってあきらめているんじゃない。ただ自分を麻痺させようとしているだけさ」(傍点・エリオット)(V・3)

フィリップは彼女がかつてよろこびを見出し出していたも

のに対する欲求をマギーに取り戻させようとする。しかしマギーに会いたいあまり、彼女に自己否定を止めさせようとする彼の努力は、実際には皮肉な意味を持つ。なぜならフィリップの愛を受け入れることは、マギーにとっては犠牲を意味するからであり、自己否定を止めれば彼の愛を受け入れることはできなくなるからである。事実、再び昔の「欲望とあこがれ」に戻ったマギーは、フィリップとの結婚をルーシーが口にするると「突然寒感に襲われたように身震い」する(VI・3)しかし作者は、フィリップの愛を受け入れることがなぜマギーにとって犠牲を意味するか、をはっきり言おうとしない。

フィリップに対してマギーが最初に抱く感情は憐憫、あわれみである。九歳の時、マギーは「もしぼくが兄さんだったらトムと同じように愛してくれるかい」と問うフィリップに、「あなたをかわいそうに思う——と、つてもかわいそうに思うでしょう」(傍点・エリオット)(II・5)と答えている。奇形の生き物すべてにやさしさを持つマギーは、まずせむしというフィリップの身体的欠陥に強いあわれみを覚える。もつとも、それだけが彼に対するマギーの感情でない。フィリップの繊細な神経、すぐれた知性、やさし

さに彼女は敬意を抱く。しかしそれよりあわれみの方がはるかに強い。自分は常に母や兄、おぼの批判の対象になってきた、一方フィリップは人の批判的な視線の対象であるという事実は、マギーの憐憫に拍車をかける。フィリップはマギーのあわれみを受け、たじろいでしまう。それは自分が例外的な存在であることの証であり、事実、マギーを愛すれば愛するほど、彼はその意識を強めてゆく。

マギーはフィリップの奇形にほだされてゆくが、やがて彼の愛はマギーの心に重くのしかかってくる。あわれみはマギーにとって危険な存在だ。それは彼女を束縛し、ずるずるとのっぴきならない情況の中に引きずり込んでゆくからだ。これはフィリップとの関係だけに限ったことではない。最後のところでマギーをもっとも苦しめるものは、みじめなステイブンへのあわれみなのだ。しかし作者がフィリップに対するマギーの感情を描くときに多用するあわれみという言葉には、マギーがフィリップに性的魅力を感じていないことをカモフラージュしようとする作者の意図が感じられる。ジョージ・エリオットは十七歳のマギーの外見描写では、彼女の肉感性、性へのあこがれ、を読者に印象づけておきながら、フィリップに性的魅力がないこ

と——少なくともマギーは彼にそれを感じていないこと——に対しては、実に手のこんだ、不自然な表現方法を取る。例えばフィリップが、時々「赤い谷」で会い、散歩してくれと頼んでも、マギーには「彼が自分の恋人になるかもしれない、あるいは彼と会うことが、恋人同志であるように見られ、非難を招くことがあり得る」(V・1)という考えは思いつかない。一年後、フィリップから愛の告白に等しい言葉を聞かされたマギーの反応を作者は次のように描く。

フィリップの声にいつもと違う感情が籠められていることにはっとして、彼女はすばやく彼の方を見た。彼が話している間に彼女の表情は大きく変化した——そこには、過去の概念を新たに調整し直さなくてはならないような知らせを聞かされた人に見られる紅潮と、かすかな痙攣があった。(V・4)

一年間も逢引きを続けておきながら、マギーは「あなたが私の恋人になるとは考えてもみなかった」と答える。そして「今までのように友人——秘密の兄妹」(傍点・筆者)のままにいてることを望む。

さらに作者は、フィリップの性的魅力の欠如を表わすた

めに、彼をきわめて女性的な男として描く。十五歳で初めて登場するフィリップの髪のはは「女の子のように」(Ⅱ・3)カールしている。彼の感受性は「なかば女性的」(Ⅴ・3)であり、彼は父親の俗物根性と好色に対して「女性が持つような、耐えがたいほどの嫌悪感」(同)を抱いている。背の高いマギーが、かがんでキスをするフィリップの青ざめた顔は「女性の愛のように、哀願するような、おぞおぞとした愛」(Ⅴ・4)に溢れている。彼がマギーに話す言葉は哀願を思わせる。またフィリップの嫉妬心も女性的であり、普通の男なら見逃すようなところでも、彼は嫉妬の材料を鋭く感じ取る。マギーとステイブンが一緒にいる所に初めて同席したとたん、二人の関係に疑惑を抱き、以後、嫉妬を感じながらじっと二人の様子を見守るフィリップの姿は不気味な印象を与える。

こうして作者は手のこんだやり方でフィリップに性的魅力のないことを表わしているが、ただマギーが彼にそれを感じていないことをあわれみによって表わそうとしたことは、マギーの描写にきわめてまずい影響を与えている。なぜなら彼女のあわれみは、性的魅力を感じないフィリップの愛が重荷になって、微妙に変化しているからである。作

者はこの変化を、フィリップとの関係においてマギーが三回感ずる安堵の中の最後の安堵によって表わそうとする。このためにマギーの描写は曖昧な、歯切れの悪い印象を与える。しかもその前に使われる安堵という言葉は、マギーが優柔不断、意志薄弱と言えほど主体性に欠け、知性的な面を持たない人物というイメージを浮かび上がらせてしまう。

マギーが最初の安堵を覚えるのは、五年ぶりに会ったフィリップが再会の日の確約を迫り、マギーのためらいを感じ取って明確な返事を要求しなかった時である。二度目に会った時、彼はさらに逢引きを続けてくれるようマギーに頼むが、彼女はもう会わないつもりで別れの印に手を差し延べる。しかし必死のフィリップは、会うつもりで会うのではなく、「赤い谷」を散歩していたら偶然会ってしまったことにするという「口実」を持ち出す。マギーが二度目の安堵を覚える時である。そして最後はトムによってマギーが無理やりフィリップから引き離される時である。

マギーはフィリップから再会を懇願されると、自分の立場を考え、思い悩む。父親が不倶戴天の敵として憎むウエイクムの息子と会うことは、愛する父を裏切ることにな

る。したがってフィリップと会うことは秘密を意味するし、彼女は秘密を持ちたくない。が一方、彼と会うこと自体は少しもやましくないばかりか、いいことだとマギーは思う。彼女の心がこの自己弁護、口実を思いつく直前、彼女はフィリップの奇形に強いあわれみを覚え、しかも彼の自虐的な言葉にほだされている。マギーの心に浮かんだこの自己弁護は、彼女が憐憫に流された証拠である。結局マギーはこの口実に従ってしまうが、そのことを作者は次のように描く。

これ〔自己弁護〕を言う声は、マギーには甘い調べに聞こえた。へ中略へしかしその音色は、止んではまた吹くそよ風に運ばれる鐘の音のように、罪はすべてほかの人の過と弱点にある、別の人を傷つける無益な犠牲というものもある、と彼女に思い込ませた。(V・1)

いったん憐憫に流されると、それまで強かった理性の警告は弱まり、「甘い調べ」が大きくなる。マギーにはもはや再会を断るだけの力はない。こういう状態にある時、フィリップは、「あなたに会えるまで私ができるだけたびたび来ます」と言う。マギーは「その決定を先に延ばしたことに大きな安堵を覚える。

二度目の逢引きをしようと「赤い谷」に向かうマギーは、理性の警告に従うだけの力を得たと思っている。彼女はフィリップに「やさしく別れを告げる決意」を抱いている。ところが、それと同時に彼女の心には「冷酷にして美しくないものすべてから離れた、静かな、そして日射が斑を描く木陰の中の散歩と、自分を迎えてくれる愛情のこもった賞賛の眼ざし」(V・3)に対する大きな期待があるのだ。マギーの「自己放棄」が急速に力を失いつつあることは明らかである。マギーの決意は、フィリップが言い出す「口実」が生む安堵の前にもろくも消え失せてしまう。こうしてみると、二度にわたるマギーの安堵は、責任回避を果たしたことに對する安堵であることが分かってくる。事実、父親を裏切ることに対する責任を、偶然に転嫁してしまふと、マギーは一年間も隠し事を続ける。

最後の安堵は、前の安堵の持つ意味のほかに、重要な意味が凝縮されている。二人の逢引きは些細なことから、それもマギーが自ら暴露するような形でトムを知るところとなってしまう。トムはフィリップの待つ「赤い谷」へ妹と共に出かけてゆく。そしてフィリップに軽蔑の言葉を浴びせるが、その中でトムはフィリップの奇形を攻撃材料にす

る。マギーはそのことに激しい怒りを覚えるが、同時に彼女の心にはフィリップから引き離されたことに対する安堵がある。マギーの怒りと安堵の描き方は微妙だ。

もし自分が完全に間違っていて、トムが完全に正しいと感じたなら、彼女はもつとすみやかに心の調和を取り戻していたらう。しかし今や悔悛と従順は、義憤としか思えない激しい怒りによって、絶えず妨害されていた。彼女の心はフィリップを思い、ひどく痛んだ。彼女は彼に投げつけられた侮辱の言葉をずつと思ひ出して、いた——その言葉を浴びせられたフィリップが感じたことをあまりにもはっきり感じ取ったので、彼女にはそれが激しい体の痛みのように思えた。彼女は足で床をとんと叩き、指が手の平に食い込むほどぎゅつと手を握り締めた。

しかし、彼女が時折心の奥で、フィリップから力づくで引き離されたことに、ある種の、ぼんやりとした安堵を覚えたのは、どういうことだろう。それは隠し事から救われたという気持は、何を犠牲にしても、よろこばしいものだというだけのことだろう。〈傍点・筆者〉(V・5)

この最後の安堵には、いくつかの要因が考えられる。作者の言うように、秘密を持ち続けることに対する罪の意識が強まって、フィリップとの関係が兄にばれることを無意識のうちに望んでいた、そしておばのミセス・プレットが世間話の中で、フィリップがたびたび「赤い谷」に出かけて行く姿を人に見られていると話した時のマギーの動揺は、その願望の表われであり、自虐的な傾向を持つマギーが兄の罰を受けることを望んだとも考えられる。

しかし作者の言い方は、もつと奥深い別の要因の存在をはっきり感じさせる。しかもフィリップとの逢引きが兄に知られるタイミングの良さにも、単なる罪の意識以上の要因があることを読者に伝えようとする意図が感じられる。

おばがドールコットミルを訪れるのは、マギーがフィリップと互いの心を相手に与えるという言葉を交した直後である。マギーは自分を犠牲にしたことで「本当に幸せな瞬間」を味わい、おばが来た時には「よろこびと疑念と苦痛」が混ざり合った、一時的な興奮状態にある。しかし作者は、フィリップとの愛の誓いがなぜマギーにとって犠牲を意味するのかを明らかにしない。その上、マギー自身の言葉はさらに読者を混乱させる。彼女がフィリップに言う

言葉——「私はずっとあなたと一緒に暮したい——あなたを幸せにするために。私はあなたと一緒に過ごした時はいつも幸せでした」「あなたと一緒にいることに飽きることはないと思います」——からは、到底、犠牲という概念は浮かんでこない。

しかし、肉体的魅力、性へのあこがれを印象づけ、「自己放棄」によって無理やり眠らせていた欲望が大きな力を貯えて目を覚ましつつあることを暗示した、十七歳のマギーの外見描写——フィリップを女性的に描くことによって彼の性的魅力のないことを表わした——しかもこのことを、何度も逢引きしておきながら、フィリップから愛の告白を聞かされるまでマギーが彼を恋人と思ったことがなかったこと、フィリップに心を捧げることは、マギーにとって性の欲望を犠牲にすることを意味している、と分かってくる。十七歳のマギーはそのことを明確に意識しているわけではない。彼女は「もしこの愛に犠牲があれば、さらに豊かで満足のゆく愛なんだ」(傍点・筆者)(V・4)と信じる瞬間を持つ。マギーの意識にあるこの条件節は、実際には性欲の犠牲の認識であろう。条件節には仮定法が使われ

ていながら、主節は仮定法のルールを守っていないのは、その表われである。

マギーはおばがフィリップの名を口にする、顔を真赤に染め、さらに「赤い谷」という名を聞くと「あたかも秘密がすべてばれてしまったかのように感じ、自分がガタガタ震えているのを見られるといけなないのでスプーンを持つこともできなかった」(V・5)ほどの動揺を見せる。マギーには、もはや自己否定は不可能であり、欲望を犠牲にしたくないという意識がどこかにあった。しかし自分から意識的にフィリップとの関係を暴露することはできない。おばがたまたまフィリップを話題にしたことは、マギーにとっては好都合である。偶然、兄に知られば、彼女はフィリップと別れさせられ、しかもそれはマギーの責任ではなく「偶然」の責任なのだ。そして彼女は欲望を犠牲にしないで済む。マギーの望む愛は犠牲のない愛なのだ。これが分かると、今度はすでに読んだ部分が別の意味を帯びてくる。フィリップが待つ「赤い谷」へと兄と共に向かうマギーは次のようなことを想像している。

すぐ身近な印象より途方もなく遠くへ飛んで行くのが常である彼女の想像は、背の高い、たくましい兄が、

弱々しいフィリップを体ごと掴み、握りつぶし、踏みつぶす様を見た。(V・5)

兄がフィリップに危害を加えはしないかという恐怖の表われに思えたこの一節は、実はマギーの意識下に潜んだ願望の表われのように思えてくる。つまり、自分に犠牲を強いたフィリップに対するマギーの憎しみの表われであるかのように思えてくる。となると、マギーにとつては、フィリップと会うことは、実際には心の負担になっていた——フィリップとの愛の誓いは、一年も逢引きを続けたという既成事実の重みにマギーが負けた——その直後の心の高ぶりは、自分の弱さを隠すためのカモフラージュだった、ということにもつながってくる。彼女の憐憫は、微妙に変化していたのである。マギーは兄がフィリップを侮辱したあと、ひとりになると、兄がフィリップに浴びせた侮辱的な言葉を、忘れようとするのではなく、「ずっと思い出して」いるのである。このことは、フィリップが傷つけられる様を何度も思い出しながら、マギーが、意識の上では彼をあれれみ、その実、意識下では憎しみを晴らしているような印象を与える。

このように、安堵という言葉によって表わされるマギー

は、責任をとるだけの精神力を持たず、いったん憐憫に流されると自分からは何ひとつ積極的な行動をとれなくなるほど受身一方になってしまう⁽¹¹⁾。ジレンマに陥ったマギーの苦悩の描写は深みに欠け、フィリップに会うたびに口にする、父や兄との強い絆という言葉は、うつろな響きしか持ち得ない。フィリップに対するマギーの感情の描写は曖昧で歯切れが悪い。結局、こういう結果を招いている原因は、作者が、マギーがフィリップに性的魅力を感じていないことをきわめて遠まわしに表現していることであろう。

十九歳のマギーにおいては、十七歳のマギーとは正反対に欲望を犠牲にしない愛が描かれる。マギーとステイブンが互いに引かれ合う様は、ジョージ・エリオットにしてはきわめて大胆に描かれる。性的関係、性を少しでも臭わせること、に対しては、徹底的に遠回しな表現方法を取るジョージ・エリオットの⁽¹²⁾作品中、「フロス河畔の水車場」ほど男女が互いの性的魅力に引かれていく姿が大胆に描かれている作品はない。と言っても直接描写があるわけではなく、マギーが官能に流されることは、もっぱら音楽に陶醉すること——それもステイブンの歌に陶醉すること——によって表わされる。性欲は声欲によって象徴されて

いるわけであるが、読者にはそのことがきわめて明確に伝わってくる。大胆と言ったのはその意味である。ここではマギーの感性的な面が前面に押し出されており、彼女に対しては「感じた」という言葉が多用される。そしてこの言葉は感覚に支配されたマギーの思考が停止してしまふことを的確に、効果的に表わしている。このことはマギーがステューブンと二人きりで小舟に乗り、フロス川を流されてゆく場面においてもっとも顕著に表われる。それでは最後にこの二人について述べてみよう。

十七歳にして父を失ったマギーは、自立心からその後二年間、「三流の教室」(VI・1)で教鞭を取るといふわびしい教師生活を送るが、作者はそのことについては一切触れない。ただ、その間にマギーが再び昔の「欲望とあこがれ」を取り戻しており、自分にはそれらを満たしてくれるものは何ひとつ与えられていないという「窮乏感」を抱くようになっていくことが示される。「自己放棄」を決意する直前のマギーと同じ状態にあるわけであるが、現在の「欲望とあこがれ」が持つ力はその時とは比較にならないほど大きいことを知っているマギーは、もはや否定による心の平和を得ることは不可能であると悟っている。そし

て作者はマギーが十年前にとった道を「安易な近道」と呼ぶ。

こういう状態にある主人公を作者は「大いなる誘惑」(第VI部につけられたサブタイトル)にさらす。作者はまず、マギーを「三流の教室」から一挙に、セント・オググスの上流社会を代表するおじディーンの優雅な家に移す。マギーは「わびしい」教師生活から一転してぜいたくな「若い淑女の生活」(VI・6)を味わうことになる。マギー自身は、バザーの手伝いをすれば男性が彼女の売店に殺到し、回りの女性のやっかみを受けるほどの美人になっている。作者はマギーからすべてを奪っておいてから、一挙に感性的なよろこびを与えるわけだ。彼女にはふんだんに音楽が与えられる。春の香の漂う美しい庭を散歩するし、フロス川での甘美な舟遊びもある。そして彼女のそばにはステューブン・ゲストがいる。彼女はなによりも、このステューブンの魅力に流されてゆく。

ステューブン・ゲストは、この作品が出版された当初から数多くの激しい批判を受けてきた。それは主に、彼があまりにも魅力に乏しい男であり、マギーの愛に値しないという理由からである。スウィンバーンにしてもレズリー・

ステイブンにしても、彼をくそみにけなし、大形と言
えるほどの嫌悪感を露骨に示している。確かにステイブ
ン・ゲストは、作品の外に連れ出し、じっくり観察したら
さほど魅力のある男とは思えないだろう。しかし、マギー
の立場に立って考える時、彼女にはステイブんに会う前
からすでに彼に引かれる、と言うより、並々ならぬ関心を
抱く動機が存在していることが分かる。彼を見るマギーの
目は、単なるいとこの恋人を見る目とはまったく異なつて
いるのだ。つまりその動機というのは、ルーシーに対する
コンプレックス、ライバル意識である。

作者はマギーとルーシーをきわめて意識的に比較対比し
てきた。両者の相違はまず髪に象徴された。幼い頃、マギ
ーは常にルーシーと比較され、ルーシーを見習うようにと
言われ続けた。椅子に坐らせれば一時間でもじっと坐つて
いる従順なルーシーに対し、マギーは衝動的で感情の振幅
が大きく、無器用なため、事あるごとに母やおばに叱られ
た。さらにマギーが常に苦しみ、幸せを味わつたことがな
いのに対し、ルーシーは何不自由なく、あり余る幸せの中
で裕福に暮している。ルーシーに対するコンプレックスが
マギーにあつても不思議ではない。それはまず、九歳のマ

ギーがルーシーを泥の中に突き倒したことに表われた。さ
らにそれは十七歳になったマギーにもはっきり認められ
る。マギーは「コリーン」⁽⁴⁾を途中で読むのを止めた理由
を、フィリップに言う。

「最後まで読まなかったわ」マギーは言った。「あの金
髪の若い女性が公園で本を読んでいる場面に来たとた
ん、本を閉じて、もうこの先は読むまいって思ったの。
読まなくてもあの色白の女性がコリーンからすべての
愛を奪い、彼女を不幸にすることがわかったわ。私は
金髪の女性が幸せをすべてひとり占めする本はもう読
まないことにしているの。金髪に偏見を持ち始めそう
ね。もしあなたが、黒髪の女性が勝利を収めるような
本を持ってきてくれたら、ちょうど釣合いがとれるん
じゃない。私はレベッカやフローラ・マッキーバーや
ミナやほかのすべての不幸な黒髪の女性のかたきをと
りたいの。(後略)」

「たぶん、きみはいとこのルーシーから愛を奪って、
自らそういう黒髪の女性のかたきをとるだろう。ルー
シーは今頃きつと、セント・オググスの誰かハンサム
な男性をかしずかせているよ。きみの方はその男にた

だニッコリ笑ってやればいい——きみの美しい小柄な
いとこは、きみの輝きにかき消されてしまふだろう」
マギーの言葉が彼女の頭の中に、金髪の女性と言えばル
ーシー、黒髪の女性は自分、というアイデンティファイケー
ションがあることを示していることは言うまでもないが、
彼女が「コリーン」を読み進めなくなったのは、「幸せを
すべてひとり占め」しているルーシーへのコンプレックス
の表われである。そしてフィリップが言った冗談を、むき
になって否定するマギーは、ルーシーを傷つけたという
無意識の願望の存在を思わせる。

「フィリップ、私のたわ言を現実にははめるなんて、
ひどいじゃない」マギーはむっとした顔で言った。
「古めかしいガウンしかない上、なんのたしなみもな
いこの私が、いとしいルーシーのライバルになれるみ
たいに言うのね、いろいろと素敵なことを知っている
し、やってもいる、それに私より十倍もきれいなのに
——たとえ私がライバルになりたいと願うほど思むべ
き下劣な人間だとしてもそうはなれはしない。それに
私は誰かほかの人がいるときは、けっしてデーンお
ばさんの家には行かないの。私に会いにきてくれた

り、ときどき家に呼んでくれるのは、ただいとしいル
ーシーが親切で、私を愛してくれるからだわ。」(傍点
筆者)(V・4)

「いとしい」という要らぬ形容詞を付けながらマギーがラ
イバル意識を否定するほど、逆にその印象は強まってゆ
く。

一見、なんのわだかまりもなくルーシーの親切を受ける
マギーには、以前と変わらぬコンプレックスがある。ルー
シーが自分の幸せを考える必要がないほど幸せであること
に、マギーはつい本音を吐いてしまう。

「私はあなたのように人の幸福をよるこばない——も
しそうならもっと満ち足りているはずだわ。人が困っ
ている時には同情する。自分が、他人を不幸にするこ
とに耐えられるとは思わない。でも幸せな人を見ると
腹立たしくなることがあるから、自分をおぞましく思
うことはしょっちゅうよ。(後略)」(傍点・エリオット)

(VI・2)

マギーの言葉には、自分の苦しみ、心の屈折がまったく通
じない、幸せすぎるルーシーに対するコンプレックスが感
じられる。マギーにとっては、ステイブンがルーシーの

恋人、事実上の婚約者であるというだけで、心ひかれる動機となっているのだ。

ステイブンに初めて会った時、マギーは「はにかみ」を覚える相手から、生まれて初めて、「顔を真赤に染め、深々とおじぎをするという捧物」を受けたことに快感を覚える。さしたる外見的魅力を持つとは思えないステイブんにマギーが感じた「はにかみ」は、ルーシーに対する意識の表われであり、快い印象は、ルーシーの恋人が自分に強くひかれたことを敏感に感じ取り、一種の勝利感を抱いた印である。しかもマギーの目に映る彼の姿は、フィリップとは正反対に、背が高くたくましい。マギーはステイブンの中に、欲望を犠牲にしない愛の可能性を瞬間的に感ずる。このことは、その快い印象が「フィリップに関する先ほどの感情（ルーシーがフィリップの名を口にした時の嫌悪感）をぬぐい去るほどであった」という言葉にはつきりと示されている。作者はさらにマギーの快い印象を「体の火照り」に喩えている。マギーはルーシーに対する勝利感を抱くと同時に、ステイブンの性的魅力に興奮を覚えていゝることは確かだ。事実、ボートから降りようとして足を滑らせ、ステイブンにすっかり手を握られたマギーは、再

び快い感覚を経験する。

「お怪我はごさいませんでしたね」彼は心配そうな表情を浮かべ、体をかがめて彼女の顔をのぞき込みながら言った。自分より背が高くたくましい人に、そのように淑やかな態度で気を使ってもらうのは、とても魅惑的であった。マギーはこれとはまったく同じように感じたことは、これまでなかった。（傍点・筆者）（同）マギーはその夜、とても寝る気になれないほどの興奮状態にある。彼女は「強い興奮の本能的なけ口」（VI・3）として部屋の中を行ったりきたりする。作者は、マギーに一体何があったのか、と問う。たしかにはた目にはたいしたことがあったとは思えない。彼女はただステイブンに会い、舟遊びをし、彼の歌を聴いただけだ。しかも彼はさしたる外見的魅力を持つわけでもない。ステイブンについては、恋人のルーシーですら、「でもあの方はハンサムよ——少なくとも世間ではとてもハンサムだと思われているわ」（VI・2）と曖昧な言い方をするし、作者自身、「どちらかと言えば人目を引く方の、二十五歳の青年」（VI・1）という言い方をする。ステイブンの歌にしても、マギーは「すばらしいバスが歌うすばらしい音歌」を聴いたつも

りでいるが、作者は「耳の肥えた人なら、大いにけちをつけたかもしれないような、田舎臭くて素人っぽい歌い方」と評する。ジョージ・エリオットは、彼が第三者の目にはけっしてすばらしく魅力に溢れた男性と映らないことをはつきり読者に知らせている。

つまり作者は、マギーがなぜこのステイブンにたちまち引かれたかを読者に分からせる信号をさかんに送っているのだ。ルーシーがマギーにとってどういう存在であるか、そしてフィリップとのいきさつを知っていれば、この信号を見逃がすことはあり得ない。したがってステイブンの魅力、彼がマギーの愛に傾するか否か、を云々することは的外れであるように思える。

ただステイブンの具体的な描写となると、それは皮相的で深みに欠け、「アダム・ビード」でジョージ・エリオットが見せたアーサー・ドニソンのすばらしい心理描写と比べると、はるかに見劣りがする。それがおそらくステイブンを魅力のない人物としている原因であろう。確かに作者は彼にはマギーに強く引かれる余地があったことを感じさせる。ルーシーの事実上の婚約者と見なされてはいなくても、彼はけっしてルーシーに惚込んでゐるわけではない。

それは彼がルーシーを選んだ理由に表われている。彼はルーシーが「まれに見る際立った存在」(VI・1)でないことに満足し、かわいらしいが「頭を狂わせるほどではない」から女房にするにはふさわしいと思つてゐる。彼にはルーシーに対する情熱はない。したがって彼が「まれに見る際立った存在」であるマギーに急速に心を奪われてゆく可能性は十分にあつたのである。実際、ステイブンは、マギーがセント・オググスの上流社会で彼が見慣れた女とまったく違うことに強く引かれる。裁縫が上手だとほめれば、貧しいから金を稼がなくてはならなかつたからだと言うマギーの、齒に衣着せぬ卒直さは、ステイブンにとつてたまらぬ刺激となり、マギーはいっそう美しく見えてくる。ところが深みにはまってゆくステイブンの描写——彼の心の中にある葛藤らしきものの描かれ方——は、なおざりな印象を免れない。

しかし、やがてひんやりした星の光の中を歩いて家に帰らなくてはならなくなつた。それは同時に、自分の愚かさ「マギーが一人きりのところを狙つて会いに行つたこと」を呪い、おれは二度とマギーと二人きりになつてはだめだ、と強く決心せざるを得ない時でもあつ

た。狂気の沙汰だ。おれはルーシーに惚れてる、おれの心は完全にルーシーのものだし、名誉を重んずる男に求め得る限りしつかりと結ばれているんだ。彼は、このマギー・タリバーにさえ会わなければ、こんな風に熱にかされなくても済んだのに、と思った。あの女は誰かの、やさしくて、風変わりで、やっかいな、かわいらしい女房になるだろう。でもおれは絶対にあんな女を選ばなかっただろう。向こうも同じ思いないだろうか。彼はそう——でないことを望んだ。行くべきじゃなかったんだ。これからは自分を抑えるようにしよう。わざと感じ悪くしてやろう——喧嘩してやろうか。喧嘩するだつて？ あんな目をした女性と喧嘩できるものだろうか——挑戦的であり、哀願するようでもある、齒向うようでいて人にしがみつこうような、横柄なように乞い求めるような——実におもしろい矛盾に満ちた目だ。あんな女性が自分に恋しておとなしくなるのを見るのは、大いに経験してみる価値のあることだ——ただし他の男にとって。(VI・9)

ジョージ・エリオットは、ステイーブンがマギーに感じる魅惑をもつばら彼がマギーの「不思議な深い目」(同)を

見たい、その目にじっと見つめられたいという意識だけを通して表わそうとする。明らかに彼はジレンマに陥っているが、作者が彼の心の奥深いところにまで入って行こうとしないために、彼の苦悩は読者に伝わってこない。ステイーブンに関して作者が加える解説はぎこちなく、時には著しく目障であることもある。例えばマギーの腕の美しさに情欲——作者は「狂った衝動」(VI・10)と呼ぶ——を覚え、そこにキスするステイーブンを弁護しようと、作者は、「女性の腕の美しさを感じない者がいるだろうか——」で始まる一節の中で「二千年前の偉大なる彫刻家の魂」を持ちだしたりするのは、その典型である。

ステイーブン・ゲストがこのように表面的にしか描かれていないのは、作者の関心がマギーに集中してしまっているからだ。マギーにつきまとうってきた作者の同情的な声は、ここにきて一段とそのポリュームを上げてゆく。十九歳になって初めて姿を見せるマギーは、ひとりになるや、たちまち目に涙を浮かべる。久し振りにセント・オググスに帰ってくると、見慣れた光景が「あまりにも苦痛に満ちた思ひ出」(VI・2)をどっと蘇らせたからである。さらにマギーは、自分には何ひとつ与えられないという欠乏感が

あまりにも強く、「束の間の現在において差し出されるものを味わう」こともできなければ、「満ち足りた自己放棄の年月の後、再び欲望とあこがれに戻った今、将来は過去よりもっと悪くなるだろう」と考えている。マギーは自分の過去も現在も未来も、すべて苦痛に満たされていることに涙を流したのである。この涙には、はっきりとマギーの自己憐憫が感じられる。マギーがピアノで奏ける曲は「去れ、うっとりしい悲しみよ!」だけだとすると、この印象はさらに強まる。

当然、このことはマギーの視点と作者の視点がきわめて接近していることを意味する。それが一面、強味を發揮していることは確かだ。ステイブンに引かれていくマギー、互いに痛いほど相手を意識する二人の描写は、見るべきところの少ないこの作品の中では光った存在である。例えば――

マギーに対する彼の個人的な心使いは、比較的少なかった。そして二人の間には明らかな隔たりすら生じていたため、彼が最初の日小舟の中で見せた丁寧な心使いに少しも似た心使いを再び見せることはなかった。もしルーシーがいない時にステイブンは部屋に

入ってくる――もしルーシーが二人を残したまま出ていくと、二人はけっして相手に話しかけなかった。

ステイブンは音楽に関する本を調べているように見えただろうし、マギーはうつつむいて、せつせと自分の仕事をしていった。互いは指の先に到るまで、気が重くなるほど相手の存在を意識していた。それでいて、互いに翌日は同じ事が起るのを期待し、待ち望んでいた。二人ともその事態を考えたり、心の中で「どういうことになるのか」と問うことはなかった。マギーは人生が何かまったく新しいものを自分に見せていると感じただけであった。そしてこの今現在の経験にすっかり心を奪われ、そのことを顧みたり、論理的に考えるだけの気力を持たなかった。(傍点・筆者)(VI・6)

しかし、マギーの視点と作者の視点が、時には区別しがたいほどに接近することは、メリットよりデメリットを大きくする。例えば、ステイブンは、「狂った衝動」に駆られ、マギーの腕にキスをする場面だ。舞踏会に出たマギーは、今夜だけは何も考えず、すべてを忘れ楽しむと思う。実際、彼女は音楽に酔い、踊りに陶酔する。マギーの感覚的な面を強く印象づけるところである。そしてステイ

ーブンが近づいてくるのを見ると、「心に、燃え上がるようなられしき」を覚える。彼の「ぐっと抑えたやさしさを漂わせる視線と声」は、マギーに「詩の息づき」を感じさせる。ワルツが始まると、二人は腕を組み、人込みを後にする。そして温室に入って行く。その中を歩きながら、ステイブンはマギーを見つめているが、それに気づいたマギーも視線を返す。二人は長い間、じっと見つめ合う。作者はその状態を「無言の告白」と呼ぶ。マギー自身、「取り返しのつかぬ告白をしたという、焼けつくような気持」を抱く。しかし、バラを取ろうとしたマギーの腕にステイブンが突然「キスの雨を降らせる」と、彼女は激しい怒りを見せる。このマギーのヒステリックな反応は、まったく合点がいかない。作者はマギーの心の内を、次のように描く。

描く。

ルーシーとフィリップ、そして自分自身の魂を裏切った一瞬の幸せを容認した罪に対して、恐ろしい罰が私に加えられたんだ。その一瞬の幸せは疫病——らしい病——にかかっていたのだ——ステイブンは私をル

ーシーより軽く見ているんだ。(VI・10)

最後のところはルーシーに対する彼女のコンプレックスを

思わせるが、それにしてもマギーの反応は、被害妄想ではないかと思えるほど大形である。マギーはステイブンに謝罪の言葉すら言わせない。彼女は、「これからは私に近づかないで」と言う。ジョージ・エリオットはこのマギーの反応の不自然さに気づいていない。彼女はマギーと一緒にあってその反応は当然だと思いついでいる。

「目覚」と題する十四章では、この現象がより顕著に現われる。フロス川で舟遊びをしていたマギーとステイブンは、そのまま駆け落ちする。そしてスコットランドへ行くこうと、途中で汽船に乗りかえる。二人は甲板で一夜を過ごす。夜が明け、眠りから覚めるとマギーの理性も目覚める。船はマッドポートに停泊している。彼女は、「私は行きません、私たちはここで別れなくてはなりません」とステイブンに言う。ここから二人の押し問答が始まるが、マギーはステイブンに、なぜ別れなくてはならないかを分からせようと、抽象的な言葉を駆使しながら、むずかしい、理屈っぽいことをとうとうと論ずる。例えば——

「それ〔愛のない節操など、誰もありがたがらないこと〕は正しいように思えます——初めのうちは。でもよく考えてみると、それは正しくない、私は確信します。節

操と誠実は、自分たちにとつてもつとも安易でもつとも楽しいことをする以外のことをも意味します。それは、他の人が私たちに抱く依存と相反するものすべて——私たちが生きてきた人生の中で、私たちに依存するようになった人にみじめな思いをさせるようなことすべて——を放棄することを意味します。もし私たちが——もし私がつもつと立派で気高かつたなら、こうした権利はもつと大きな力で私を捉えていたでしよう——良心が目覚めている今現在、それが私の心を圧しているように、私は絶えずその圧力を感じたことではようから、それと相反する感情がこのように私の中で大きくなることはなかつたでしよう。そんな感情はただちに消されたと思います——私は真剣に助けを求めて祈り、恐ろしい危険から逃げるように、それから逃げたことではよう。自分の言い訳をしよつとは思いません——せん——せんせん。もし私が弱くて、自分本位で、冷酷な人間でなかつたなら、もし自分の苦痛を思わず、フィリップとルーシーの苦痛を考へることができたら、誘惑はすべて打ちのめされ、私は自分が実際にやつてしまつたように、二人を裏切つたりしなかつたで

しよつ。ああ、ルーシーは今、何を感じているかしら。私を信じてくれた——愛してくれた——とても親切にしてくれた。どうかあの人のことを考へて……」

(傍点・エリオット)

マギーの会話はこんな調子で続いていく。読者はとてもマギーの言葉についていけない。それは、マギーが話しているというより、ジョージ・エリオットが直接ステイブンに話しているような印象を与える。だいたい、マギーは能弁になれるような情況にはいない。結論だけ言つて、あとは沈黙を守ることしかできないような情況に置かれてははずだ。作者はマギーと自分の区別がまつたつかなかつているとしか思えない。

このことはマギーの言葉の内容によりはつきり表われている。マギーの言葉はとても読者を納得させるものではない。マギーは、要するに過去の絆の世界に帰り、ルーシーとフィリップに償いをしたいのだ、とステイブンに言う。彼女は過去との絆を「もつとも神聖な絆」と呼ぶが、はたしてそうだつたらうか。過去はただ彼女を傷つけ苦しめただけのものではなかつたか。マギーには母に対する愛情は感じられなかつた。彼女をもつとも傷つけたのはトム

であり、彼女は自分と兄との間にできた溝が、時を経ては経つほど深くなり、もはや兄との接点を見出すことはできなうと感じていた。ルーシーとフィリップは共にマギーが傷つきたいという願望を抱いた対象である。マギーは「記憶と愛情と完全なる善へのあこがれ」が自分をしっかりと捉えており、ステイブンと結婚すれば「後悔」に苛まれるだろう、そして現在に負けるより心の中の「神の声」に従うべく、現在を捨てることを選ぶと言う。しかし、「記憶」は彼女を悲しませるだけであり、「愛情」は感じられない。「完全なる善へのあこがれ」は、時折作者がマギーの描写の中で口にするだけであり、その実体はまったく描かれていなかった。そして彼女が言う「神の声」の正体はいったいなんなのだろう。マギーがセント・オググスに帰る理由は、けっして彼女が言うようなきれいな事ではないはずだ。

作者は以前、人間にとって自分が幼年時代を過ごした土地——自分が根を生やした土地——で暮らすことから得る「くつろぎ」にまさる「くつろぎ」はないことを指摘した(Ⅱ・1)。そして父タリバーは、生まれ育った土地を離れては生きていけない人間であり、だからこそ、たとえ宿敵

の下で働くことになるうとも、ドールコットミルにとどまらざるを得なかったと描かれた。マギーがタリバーの血を引くことは、彼女にもその傾向があることを感じさせる。しかし、ひたすらセント・オググスに帰ろうとするマギーには、その動機は見当たらない。作者がその傾向を強調するのは、ドクター・ケンが「世間の女房」に敗れ、マギーに町を出ることを勧める時である。マギーが繰り返えし口にする絆は土地との絆でもないのだ。

要するに、マギーの言葉は欺瞞と矛盾に満ちており、もはや詭弁としか思えない。我々の印象は、マギーの言葉とはまったく異なる。マギーはステイブンと駆け落ちすることによって、ルーシーとフィリップを傷つけたいという願望を実現した。九歳のマギーは、兄の愛をひとり占めにしたルーシーを泥の中に突き倒した。しかし十九歳のマギーには、そういう短絡的な反応は不可能である。十七歳のマギーは、自分に欲望の犠牲を強いたフィリップを、兄によって傷つけさせた。再びマギーの前に現われたフィリップは、彼女とステイブンの関係を疑い、嫉妬と疑惑の眼差しを向けている。確かにマギーは、フィリップと二年ぶりに再会した時、涙を浮かべるが、マギーの涙は、彼女が

なつかしさから流す涙ではない。自分を溺れさせようとして
いるステイブンの性的魅力に対する抗体、解毒剤をフ
イリップの中に見出したからである。しかし彼に対する
マギーの感情に変化はない。ルーシーがフィリップとの結
婚を実現させるように努力してみると、マギーは身
震いするほどの嫌悪感を覚えている。マギーに昔と変わら
ぬ愛を抱き続けるフィリップは、「未来は二度と過去とは
つながらないのか」(V・10)と言い、昔の縫が戻ること
に対する期待を暗示する。マギーは兄との絆が何よりも強い
ことを理由に、二人は永久に別れていなくてはならないと
断言し、かつステイブンとの関係をきっぱり否定する。
したがって彼女の駆け落ちは、フィリップとルーシーを著
しく傷つける。

しかし、いったん願望が実現されると、今度は激しい罪
の意識が出てくる。マギーがセント・オググスに帰りたく
なるのは、明らかに兄の罰を欲したのであり、それを受け
ることによって罪の意識をなくしなかったのだ。事実、帰
ってきたマギーは、まっすぐ兄のところへ向かっている。
第七部は、まるでマギーが帰ってくるのを待ち構えている
かのように立っていたトムが、マギーに激しい非難の言葉

を浴びせる場面から始まる。

さらにこのことに、よろこびに対するマギーの拒絶反
応、罪悪感が加わる。彼女は自ら「不幸と悲しみは習慣に
なる」(VI・2)と言っている。これはマギーがよろこびを
受けつけなくなっていることを暗示する。それは「自己放
棄」が残していった深い爪跡かもしれないが、いずれにせ
よマギーにはその傾向が認められるのだ。たしかにマギー
はステイブンに溺れていく、そして彼女の感覚的な面が
強く出てくる。しかし、いったん何か決定的なことがある
と、よろこびに対する拒否、罪悪感がむくむくと頭をもた
げてくる。腕にキスされた時の、あの大形なマギーの反応
は、その証拠だ。駆け落ちし、一夜明けたマギーの心に同
じ反応が現われたと考えるもおかしくはない。

さらにマギーは、自分たちの行為が、第三者の目には取
り返しのつかない行為に映ることを認めようとしなない。マ
ギーは、「すべてはもうなされてしまった」と言うステイ
ブンに、「いいえ、まだなされていません」と答える。
マギーには、駆け落ちが、もうすでに人に苦しみを与えて
しまったことに対する認識はある。しかし彼女は「最後の
卑劣な行為——打ちひしがれた心から絞り出したよろこび

を味わうこと」から逃げるには遅すぎないと信じている。

彼女は

「でもみんなは私の言うことを信じてくれるでしょう。

私はすべてを告白します。ルーシーは私を信じてくれる——あなたを許してくれる、それに——それに——正しいことにしがみついていれば何かいいことがあるわ。(後略) (傍点・エリオット)

いかにもマギーは樂觀的に見えるが、彼女は物事を樂觀で見る人間ではない。彼女の言葉には、人は私を理解し、許してくれる、と信じていることによって、他人の非難が与える苦痛から目をそむけていることが感じられる。さらにステイブンとの結婚を、「卑劣な行為」「よろこび」と、矛盾した言葉を並列しながら考えていることは、結婚を「よろこび」と見なし、罪悪感を抱いたと同時に、後悔という形で「卑劣な」結婚が与える苦痛から逃げようとしているようにも思える。それはいかにもマギーらしい反応と言える。マギーはたしかに苦痛ばかり味わってきた。しかしその中で彼女が見せてきたことは、実際には苦痛からの逃避であり、絶望の奈落を見ることの拒否であった。九歳のマギーは空想という麻薬の常習犯であった。その麻薬が効か

なくなつた十三歳のマギーは自分の意志で自分の感情を麻痺させた。それも不可能となつた十七歳のマギーは、フィリップを傷つける苦痛に耐えられず、彼に言われるまま、ずるずると会い続けた。そして十九歳になつた今、マギーは結婚が生む苦痛から逃避しようとし、自分の行為はもはや取り返しがつかないという絶望感を拒否している。こういうマギーと、結末において彼女を絶望の淵に立たせた瞬間、永遠の麻痺——それも心安らかな死——を与えてやる作者はきわめて似通っている。

セント・オググスに帰つたマギーは、予想に反して世間の激しい非難の的となるが、彼女が幻滅を味わう姿は見られない。「世間の女房」を暴くことに作者が気を奪われているからだ。その原因についてはすでに述べた通りである。マギーの苦悩は別の要因によって強められる。ドクター・ケンの敗北は、自分は生まれ育つた土地に住むこともできないのか、とマギーに思わせる。もうひとつは、切々と慕情を訴えるステイブンの手紙が蘇らせる誘惑である。

ただフィリップとルーシーはマギーを許す。嫉妬に苦しめられたフィリップは、マギーの駆け落ちによって大きな苦悩を経験するが、やがてそこから抜け出し、マギーに共

感を示す。フィリップに見られる共感への改宗は、彼にそれだけの資質が与えられていたので我々には納得がいく。ただ、彼の改宗を讀者は彼の手紙を通して知るだけではあるが。

しかしルーシーの場合、あきらかに作者の人物把握はゆるんでいる。ルーシーはマギーを許すが、作者はそれを、ルーシーに道徳的進歩があった結果として描く。ルーシーは単純と自己満足に徹した人間として描かれてきた。マギーはルーシーを親切で思いやりがある人間だと思っているが、それは単に幸福過多と愛他主義を取り違えただけのことである。ルーシーには他人の苦悩を理解できるだけの感受性も知性も与えられていない。現に、マギーの前で平然とフィリップの奇形を話題にする。マギーとステイブンが自分の目の前で強烈に引かれ合っているのを見ていながら、まったくそのことに気がつかず、心の平和を保ち続ける。二人は意識し合うからこそ時には互いにつれなくすることがある。それを見てルーシーは、ただ、二人は相性が悪いと思うだけである。フィリップとは好対照である。たとえ駆け落ちを知り、寝込んでしまうほど苦しんだとしても、ルーシーには共感への改宗はあり得ない。

以上述べてきた通り、「フロス河畔の水車場」は、大きな欠陥が目立つ作品である。ジョージ・エリオットが、この作品を書き終えた直後、ひとりで大泣きしたり、自ら、その後しばらくの間、「マギーとマギーの悲しみ」が自分につきまとい、苦痛を与えたと言っている事実は、いかに彼女がマギーに対する憐憫に流されていたかを示していると言えよう。さらにこのほかにも、複雑な個人的感情が入り混ざり、作品は統一を欠いた、作者のビジョンすら感じさせないものになった。しかし、ジョージ・エリオットはこの失敗に気づいた。この作品を書き上げたのち、準備にとりかかった「ロモラ」(実際には「サイラス・マーナー」が「フロス河畔の水車場」のあと書かれる)では、舞台はイギリスから遠く離れたフロレンスに移り、時代も十五世紀末に変わる。明らかに、作品の中ではできるだけ自分を書かないようにしなくてはならないという反省の表われである。さらに「水車場」以後、常に複数のプロットを使うようになったことは、自分の関心をひとりの人物に集中させないようという作者自身の配慮が感じられる。さらにそこには、共感の教義を説くことができなかつたことに対す

る反省も感じられる。ジョージ・エリオットは道德的ビジョンに近づく動きと、逆にそこから遠ざかっていく動き——リバー・スタンプの言う肯定的動きと否定的動き——を、それぞれ別のプロットの中で展開させていくようになる。「水車場」は彼女に大きな教訓を与えてくれた作品でもあるのだ。

〔註〕

- (1) *The Great Tradition* (Penguin Books, 1967) p. 52.
- (2) ジョージ・エリオットは *Sister Maggie* について、*The House of Tuliver, or Life on the Floss* における *The Tuliver Family, or Life on the Floss* とするか決めかねていたがブラックウッドが *The mill on the Floss* を提案するや、水車場が実際にはリブル川の川辺にあることに多少抵抗を覚えながらも、あっさりそれに決めていく (*The George Eliot Letters* Ⅲ巻二四〇、二四五頁参)。
- (3) 同書一〇九、二〇九、二二二頁参。
- (4) 同書二二二〜二三頁参。
- (5) 同書三八頁参。
- (6) 同書三三三頁参。
- (7) 既出五八頁参。

(8) *Letters* Ⅲ巻 三三一頁参。

(9) *Letters* Ⅶ巻 二八〇、二八五、二八七頁参。

(10) 安堵 (relief) という言葉は実際には四回使われているが、重要な意味を見い出されるのは、そのうち三回である。

(11) ブルワー・リトンは、トムがフィリップを侮辱する場面でマギーが何もせず黙っていることは彼女の性格と矛盾し、彼女の「抵抗したい衝動はフィリップに激しく同情して叫ぶことであつたに違ふなし」と言っている (*George Eliot: The Critical Heritage*, p. 121.)。

それに対してジョージ・エリオットは「マギーは『赤い谷』における喧嘩の場面では、あまりにも受身であるように描かれている。物語がまだ原稿の段階なら——その欠点を指摘してみると——その場面に手を加えるか、あるいはむしろ敷衍するところだ」と答えている (*Letters* Ⅲ巻三一七頁)。しかしマギーはフィリップとの関係においては始終受け身であり、彼女がどのように手を加えたり敷衍するつもりだったかは理解しがたい。

(12) この作品における次の例を参照されたし。

弁護士ウエイカムは買い取ったドールコットミルの管理を若いジェッツアムという男に任せる。名前からして「投

荷) [Jtsam)」を思わせるこの若者は實際、どうたらな道楽者であり、トムも「だらしない奴」と呼ぶ。このジェッツァムに、人をきわめて冷静に正しく判断できる男として描かれているウエイカムがなぜ特別に目をかけるかは読者には不思議に思える。作者は二人の関係を曖昧にしているが、息子フィリップが父親の好色に激しい嫌悪感を抱き、さらにトムのおじディーンが、「あの男〔ウエイカム〕は若いジェッツァムに（水車場の）仕事をやらせたんだ。奴が水車場を買い取ったにはそれなりのわけがきつとあったんだ」(VI・5) と意味ありげに言うとなると、考えられることはただひとつ——ジェッツァムはウエイカムの私生児だということだ。

- (13) スウィンムーンについては *George Eliot: The Critical Heritage* 一六五頁參。レスリー・ステイブンスによつては *George Eliot* (London, Macmillan), 1902, 100—104頁參。
- (14) *Corinne ou l'Italie* [Eng. trans., "Corinne or Italy"] Madame de Staël 作 (一八〇七年出版)。
- (15) *Letters* Ⅲ卷二七〇頁參。
- (16) 同書二八五頁。
- (17) *Movement and Vision in George Eliot's Novels* (New